

福岡市西区

太 田 遺 跡
Oho ta site
(III)

—市道野方・金武線新設道路建設に伴う発掘調査報告書—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第304集

1992

福岡市教育委員会

太田遺跡(Ⅲ)

—市道野方・金武線新設道路建設に伴う発掘調査報告書—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第304集

正誤表

ページ	行	誤	正
中表紙		調査番号 8521	調査番号 8634
I	3	重要な課題となっています	重要な課題となっています
I	16	遺跡調査番号 8662	遺跡調査番号 8634
Y	6	PL. 6 1 1区SD-02遺物出土状態(南から)	1区SD-02遺物出土状態(北から)
Y	6	PL. 6 2 1区SD-02遺物出土状態(東から)	1区SD-02遺物出土状態(西から)
Y	7	PL. 7 2 1区SD-02遺物出土状態(北から)	1区SD-02遺物出土状態(南から)
30	16	02016は土師器椀である。	02016は須恵器椀である。
30	16		16行の文章を19行に移動
PL. 6	1	1区SD-02遺物出土状態(南から)	1区SD-02遺物出土状態(北から)
PL. 6	2	1区SD-02遺物出土状態(東から)	1区SD-02遺物出土状態(西から)
PL. 7	2	1区SD-02遺物出土状態(北から)	1区SD-02遺物出土状態(南から)
付図	1	図面内XX砂尺	図面内XX砂唐

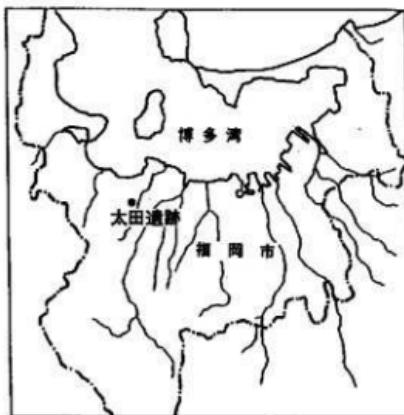
福岡市西区

太田遺跡

Oho ta site
(III)

—市道野方・金武線新設道路建設に伴う発掘調査報告書—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第304集



1992

太田遺跡第3次調査
調査略号 OHT-3
調査番号 8521

福岡市教育委員会

(表紙題字：結城シズ氏)

序

近年、福岡市では都市圏拡大に伴い道路網の整備が急速に行われています。その反面、埋蔵文化財の保存も重要な課題となっています。

野方から金武にかけては、福岡市内でも貴重な文化財と自然に恵まれた地域です。国史跡野方遺跡や吉武遺跡群をはじめとして数多くの埋蔵文化財があります。

西区野方から金武までの新設道路を土木局が計画され、そこで土木局と事前協議を行い、やむを得ず現状保存出来ない所については事前に発掘調査を実施し、記録による保存に努めることになりました。

今回報告します太田遺跡は、区再編成に伴う道路新設工事に先立って行った発掘調査報告書です。

調査の結果、弥生時代から歴史時代にかけての数多くの遺構・遺物が確認され、予想以上の成果をあげることができました。これも地元をはじめ関係者の皆さま方の埋蔵文化財に対するご理解とご協力によるものであります。

本書が地域の皆様ならびに市民の各位の文化財保護のご理解を深められる上で広く活用されるとともに、学術研究の分野においても貢献できれば幸いです。

発掘調査から資料整理に至るまで多くの方々のご協力に対し、心から謝意を表するものです。

平成4年1月13日

福岡市教育委員会

教育長 井口雄哉

例　　言

1. 本書は福岡市西区飯盛に新設される道路建設工事に先行して埋蔵文化財の調査を昭和62年に実施した調査記録である。野方・金武線新設道路建設に伴う発掘調査第6次調査の報告書である。
2. 事業は福岡市土木局道路計画課により令達され、同教育委員会文化部埋蔵文化財課が実施した。
3. 本書に掲載した遺構の実測は二宮忠司、田中積二、大庭友子、加藤元信が、製図は大庭が行なった。
4. 写真撮影は現場写真を二宮、田中、大庭が行ない、遺物写真は二宮、大庭が行ない、写真焼付けは森千賀子、濱田澄美枝、木村絹子、石津満寿美、桑野正子がこれに当たった。
5. 本書の執筆は大庭と二宮が行なった。
6. 本書の編集は二宮が行なった。
7. 本報告書に関する記録・遺物類は整理後、福市教科文センターに収蔵・保管される。
8. 土器、石器、鉄器、木器の挿図内番号は登録番号を示す。

遺跡調査番号	8662	遺跡略号	OHT 3次	調査期間	1987年（昭和62年）
調査地地籍	西区飯盛字太田他	分布地図番号	93-A-2		
開発面積	6,000m ²	調査対象面積	3,500m ²	調査面積	3,200m ²

本文目次

第Ⅰ章 はじめに.....	3
1. 発掘調査に至る経過.....	3
2. 発掘調査の組織と構成.....	5
第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史的環境.....	7
第Ⅲ章 調査の記録.....	13
1. 調査の概要.....	13
2. 検出遺構.....	15
1区の検出遺構.....	15
SK-100甕棺墓.....	15
SB-01~03掘立柱建物.....	15
竪穴式住居址.....	15
溝状遺構.....	16
水田址.....	16
2区の検出遺構.....	16
土壤（SK）.....	16
杭列遺構.....	22
土層.....	22
3. 出土遺物.....	23
土器.....	23
1区出土の土器.....	23
2区出土の土器.....	31
石器.....	41
1区出土の石器.....	41
2区出土の石器.....	41
第Ⅳ章 まとめ.....	42
1. 太田遺跡群について.....	42
2. 近世の陶磁器—特に能古焼について—	42

挿 図 目 次

第1図	周辺の遺跡（縮尺1/25,000）	1
第2図	野方・金武線路線図と調査地点（縮尺1/10,000）	2
第3図	遺跡周辺の地形図（縮尺1/12,000）	4
第4図	吉武・太田遺跡群遺構配置図（縮尺1/8,000）	6
第5図	太田遺跡群遺構配置図（縮尺約1/800）	12
第6図	1区SB・SC・SK遺構実測図（縮尺1/20, 1/100）	14
第7図	2区SK遺構実測図－1（縮尺1/40）	17
第8図	2区SK遺構実測図－2（縮尺1/40）	18
第9図	2区SK遺構実測図－3（縮尺1/40）	19
第10図	2区杭列実測図（縮尺1/40）	20
第11図	1区出土土器実測図－1（縮尺1/4, 1/8）	24
第12図	1区出土土器実測図－2（縮尺1/4）	25
第13図	1区出土土器実測図－3（縮尺1/3）	26
第14図	1区出土土器実測図－4（縮尺1/3, 1/4）	27
第15図	1区出土土器実測図－5（縮尺1/4, 1/8）	28
第16図	1区出土石器実測図（縮尺1/3）	29
第17図	2区出土土器実測図－1（縮尺1/3, 1/4）	32
第18図	2区出土土器実測図－2（縮尺1/2, 1/4）	33
第19図	2区出土土器実測図－3（縮尺1/3）	36
第20図	2区出土土器実測図－4（縮尺1/2, 1/3）	37
第21図	2区出土土器実測図－5（縮尺1/2, 1/3）	38
第22図	2区出土瓦実測図（縮尺1/4）	39
第23図	2区出土瓦・石器実測図（縮尺1/3, 1/4）	40

図版目次

PL. 1	1	1区全景（南から）	2	1区全景から（北から）
PL. 2	1	1区SD-02と水田址全景（南から）	2	1区SD-04と水田址全景（北から）
PL. 3	1	1区全景（南から）	2	1区SC-01近景（東から）
PL. 4	1	1区SD-02全景（北から）	2	1区SD-04近景（東から）
PL. 5	1	1区SK-100検出状態（南から）	2	1区SD-02近景（東から）
PL. 6	1	1区SD-02遺物出土状態（南から）	2	1区SD-02遺物出土状態（東から）
PL. 7	1	1区SD-02全景と取水口（南から）	2	1区SD-02遺物出土状態（北から）
PL. 8	1	1区SD-02遺物出土状態	2	1区SD-02遺物出土状態
PL. 9	1	1区SD-02遺物出土状態	2	1区SD-02遺物出土状態
PL. 10	1	1区土層断面（東から）	2	1区土層断面（東から）
PL. 11	1	2区全景（北から）		
PL. 12	1	2区近景（北から）	2	2区全景（南から）
PL. 13	1	2区SK-11検出状態（東から）	2	2区SK-11上層断面（東から）
PL. 14	1	2区SK-11遺物出土状態（東から）	2	2区SK-17検出状態（東から）
PL. 15	1	2区SD-01内杭列検出状態（西から）	2	2区SD-01内杭例検出状態（南から）

PL.16 1区出土遺物（縮尺1/4, 1/8）

PL.17 1区出土遺物（縮尺1/2, 1/4, 1/6）

PL.18 1・2区出土遺物（縮尺1/4）

PL.19 2区出土遺物（縮尺1/4, 1/6）

PL.20 2区出土遺物（縮尺1/2, 1/4, 1/6）

PL.21 2区出土遺物（縮尺1/2, 1/4）

PL.22 2区出土遺物（縮尺1/2, 1/4）

表 目 次

Tab. 1 野方・金武線路線内遺跡発掘調査一覧	3
Tab. 2 古武遺跡群調査一覧	10
Tab. 3 羽根戸原遺跡群調査一覧	11
Tab. 4 都地遺跡群調査一覧	11
Tab. 5 土壙・掘立柱建物・堅穴式住居址一覧	21・22

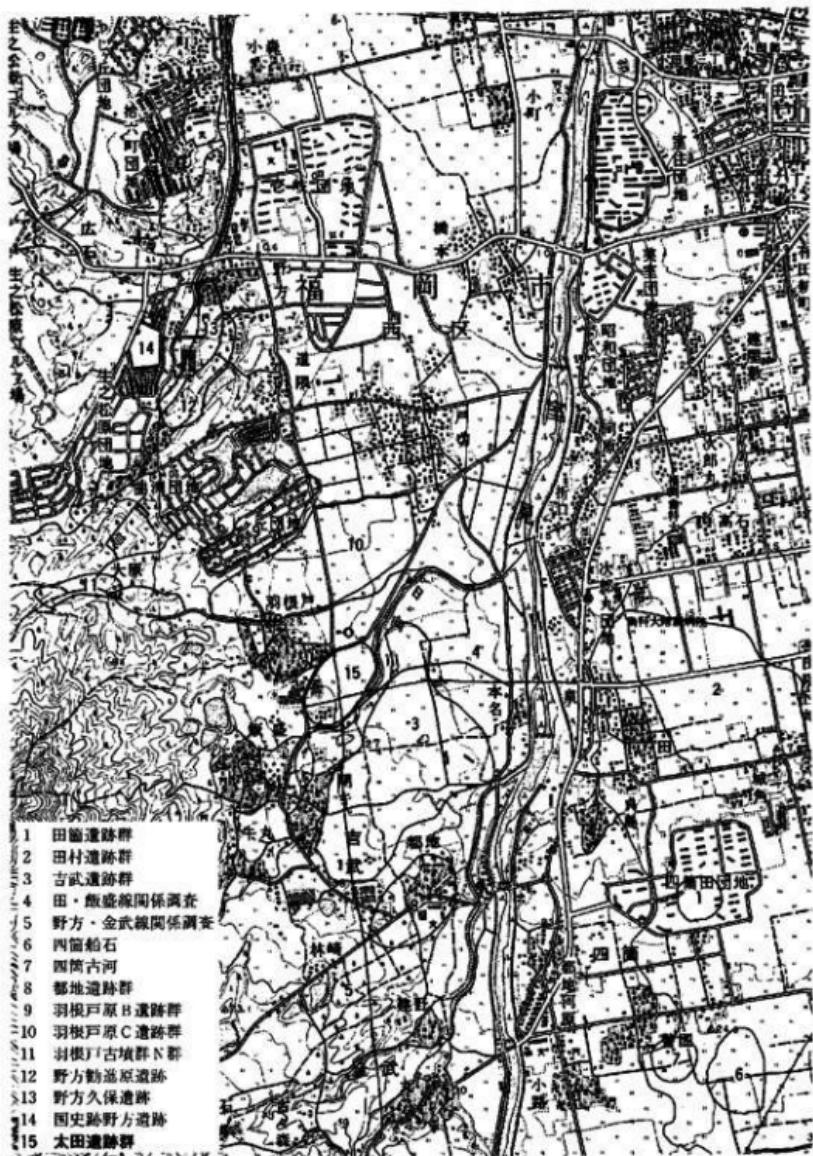
付 図

付図-1 太田遺跡1区土層・遺構配置図（縮尺1/100, 1/120）

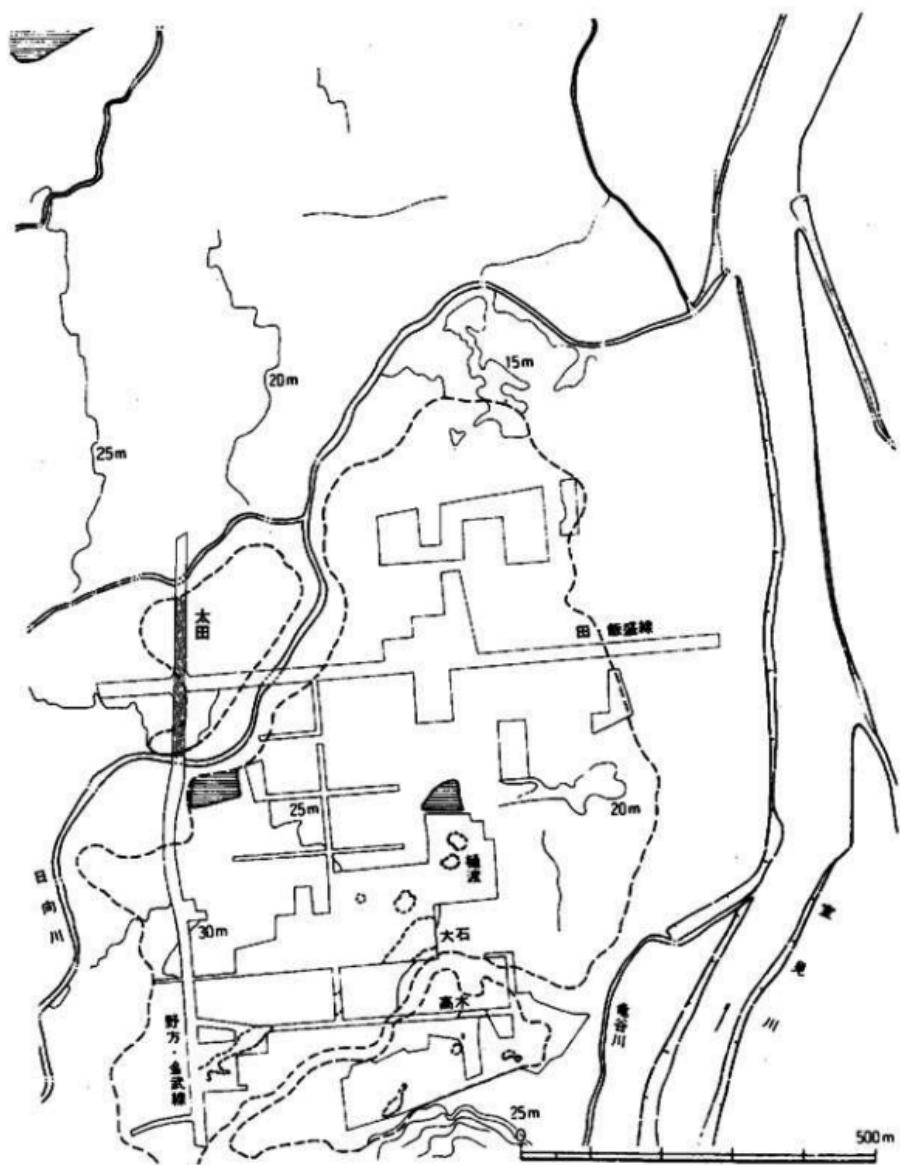
付図-2 太田遺跡2区上層・遺構配置図（縮尺1/50, 1/100）

付図-3 太田遺跡1区溝状遺構及び土器出土状態（縮尺1/40）

付図-4 太田遺跡群遺構全体図（縮尺1/500）



第1図 周辺の遺跡 (縮尺1/25,000)



第2図 野方・金武線路線図と調査地点（縮尺1/10,000）

第Ⅰ章 はじめに

1. 発掘調査に至る経過

福岡市は人口増大に伴って行政区の分区を1962年(昭和37年)に5区から7区(早良区・城南区を新設)とした。旧西区は城南区、早良区、西区の3つに分割され、室見川を境とした西側を新しい西区とした。

それに伴って各区役所の整備、道路の新設・改良工事が急務となつた。特に西区の野方、金武周辺の道路新設は急を要したため土木局道路計画課、西区役所土木農林課は1963年(昭和38年)よりその計画を実施するにあたり教育委員会文化部文化課(昭和40年度、平成3年度に機構改革があり、文化部埋蔵文化財課、文化財部埋蔵文化財課)に埋蔵文化財の有無についての照会が提出された。これを受け文化課では、試掘調査を行い7ヶ所の遺跡を確認し、その旨を道路計画課に報告、協議を重ねた。その結果、現状保存に関しては非常に困難であり記録保存のため発掘調査を実施することとなった。

第1表に示すとおり、1983年の都地遺跡3次、金武・城田遺跡を皮切りに四つの遺跡群(都地遺跡群、吉武遺跡群、太田遺跡群、羽根戸原遺跡群)に細長いトレンチを南北方向に入れた状況であり、遺跡群の広がりや谷部の状況が明確となった。特に七反田遺跡は谷と谷とに挟まれた部分に検出され、谷部の形成も未発達で、谷とするより溝的な要素が強いものであった。

1983年(昭和58年)から87年(昭和62年)にかけて下記の遺跡を調査した。報告書作成は、1988年(昭和63年)から今年度(平成3年度)で野方・金武線新設・改良道路建設に伴う発掘調査報告はすべて終了する。

調査番号	調査員	遺跡名	調査面積(m ²)	調査期間	所在地	報告書
8344	1	都地遺跡3次	1,630m ²	830601~830731	大字金武字都地	市報186集
8322	1	金武城田	1,862m ²	831221~840329	大字金武字城田	市報186集
8426	2	吉武遺跡群	2,300m ²	850326~850531	大字吉武字三十六	市報187集
8528	3	羽根戸原C遺跡	1,562m ²	851028~860407	大字羽根戸	市報187集
8622	4	都地遺跡4次	2,560m ²	860514~860730	大字吉武字衣屋田	市報233集
8659	5	七反田遺跡	2,145m ²	861225~870315	大字吉武字七反田	市報233集
8634	6	太田遺跡群	3,200m ²	870201~870425	大字飯盛字太田	今回報告
8662	7	吉武遺跡群	2,300m ²	870301~870510	大字吉武	今回報告
8714	8	吉武遺跡群	1,480m ²	870601~870909	大字吉武	今回報告

Tab. 1 野方・金武線路線内遺跡発掘調査一覧



第3図 遺跡周辺の地形図（縮尺1/12,000）

2. 発掘調査の組織と構成

調査委託 福岡市土木局道路計画課

調査主体 福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課第1係

教育長 佐藤善郎(前任) 井口雄哉

教育次長 尾花 剛(前任) 河野清一

部長 河野清一(前任) 花田兎一

課長 生田征生(前任) 折尾 學

係長 折尾 學(前任) 飛高憲雄

事務 岸田 隆(前任) 中山昭則 寺崎幸男 吉田麻由美

発掘調査 二宮忠司(主事) 佐藤一郎

調査・整理補助 大庭友子 田中稿二 加藤元信

発掘・整理作業 柳光雄 牛尾豊 尾崎達也 太田孝房 鬼丸邦広 広田義美

真名子時雄 三苦宗澄 結城弥澄

有吉貞江 池 弘子 伊藤みどり 上原チヨ子 牛尾秋子 牛尾シキヨ

尾崎八重 大内文恵 金子ヨシ子 菊池栄子 倉光ナツ子 白坂フサヲ

正崎由須子 荻田シズノ 荻田タエ子 清水文化 末松信子 杉村文子

惣慶とみ子 多田暁子 田中タツ子 津田和子 典略 初 富永純子

西鷗和子 西鷗タミエ 西鷗初子 西納テル子 西納トシエ 能美八重子

野坂三重子 原 早苗 平田政子 半野ミサヲ 藤野ふじ子 古井モコ

藤 タケ 細川ミサヲ 真鍋チエ子 松本愛子 松本マサ子 松本フジ子

松本トシエ 真名子ゆきえ 山西人美 山本チエ子 山下サノエ 結城シズ

結城信子 結城千賀子 吉岡員代 吉岡タエ子 吉岡蓮枝 吉岡竹子

古竹早苗 吉積ミエ子 臨山美代子 臨坂ミサヲ

整理作業 青柳忠子 飯田千恵子 牛尾美保子 太田頼子 尾崎京子 亀井律子

北島藤子 斎藤美紀枝 清水優子 平田ミサ子 日名子節子 内山孝子

藤崎洋子 真名子順子 渡辺ちず子 京塚ハツミ 海内美也子

このほかにも地元の方々をはじめとして多くの方々のご理解、ご協力によって事故も無く調査・資料整理・報告書が完了する運びとなりました。これもみなさまのご協力の賜物であります。ここに紙面をもって感謝の意を表します。



第4図 吉武・太田遺跡群遺構配置図（縮尺1/8,000）

第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史的環境

背振山麓から派生した山塊は、北と西に広がり、西の山麓は糸島平野と早良平野を二分する大丘陵地である西山、飯盛山、叶穂・長垂山・高祖山へと続き、博多湾に達する。北には油山、鴻巣山、西公園と続き、両山塊に挟まれた東西約7km、南北約8kmの平野が早良平野である。

遺跡は福岡市西区大字飯盛字太田に位置し、西側に飯盛山山麓東側斜面が広がる。国土地理院発行『福岡』1/50,000 (NI-52-10-11, 福岡11号) の左上端より下に28.6cm、右に12.4cmで、ほぼ東経130° 19'、北緯33° 32' 20" に位置する。

背振山麓を源とする室見川が山麓の東側に添って北流し、四つの遺跡群を載せる河岸段丘の東側大地を削りながら流れ博多湾にそそぐ。また、西山、飯盛山山麓から源を発する日向川が遺跡群の東側を東流し、室見川に合流する。

飯盛山の南側に古代からの幹道が開かれ、これは日向岬と呼ばれ早良平野と糸島平野とを結ぶ幹道であった。この幹道及び日向川沿いには数多くの遺跡が分布する。市道・野方金武線の発掘調査をもとに周辺の遺跡について述べる。

金武・城田遺跡^{注1)} 市道・野方金武線の第一次発掘調査で発見された遺跡で、昭和58年度に調査を行う。遺構は奈良時代の掘立柱建物17棟、堅穴式住居址5軒、溝4条、土壙13基、製鉄遺構22基等が検出されている。

都地遺跡群の調査

都地遺跡群第3次調査^{注2)} 市道・野方金武線の第一次発掘調査で発見された遺跡で、昭和58年度に調査を終了している。遺構は弥生時代中期から後期にかけての甕棺墓45基、木棺墓1基、古墳時代の掘立柱建物15棟、溝2条、歴史時代の土壙墓3基、溝2条等を検出している。

弥生時代の甕棺墓の検出状態を見るとほぼ南北から北東を軸として約20mの幅で確認されている。これは吉武高木・大石・猶渡遺跡の甕棺墓の配列とよく類似している。甕棺ロードとも呼べる形状を呈している。特に最近、吉野ヶ里遺跡で列埋葬と称したものと同じ様相を示している。

周辺には南北朝時代から安土・桃山時代にかけての都地館跡がある。現状は土塁しかないが全面調査をおこなえば余容が明らかになると思われる。昭和52年度に一部破壊されるため土塁の調査を行った。土塁は内側に巡らされ、外側に周溝を持つ形態である。溝から土塁までの高さは約4m(溝の深さ2m、土塁の高さ2m)である。現在判明している廓は北と南の2ヶ所である。文献にある細川若狭ノ守の館跡と考えられる。また福岡市文化財指定の妙法寺碑文書の中にあることもこれを裏付けている。

この他にも板碑や石造狛犬(県指定)等があるが、この時代の飯盛神社の繁栄から発せられた

ものである。飯盛山の山頂には経筒や瓦絆の出土はよくしられている。

都地南遺跡^(註3) 都地遺跡群第2次調査地点として礎石を配する掘立柱建物が3棟検出した都地南遺跡がある。この遺跡は都地館跡南500mに位置しており報告者も同時期の可能性を示唆している。

また、近くには金武小学校内斎場遺跡や山間部には6~7世紀にかけての古墳群が形成されている。福岡市には貴重な装飾古墳である金武古墳群吉武K群第8号墳^(註4)や市文化財指定、通称夫婦塚古墳と呼ばれている金武古墳群乙石H群^(註5)等がある。

都地遺跡第4次調査^(註6) 都地遺跡第4次調査は野方・金武線の第4次調査で、都地遺跡群第3次調査の道路を挟んで北側に位置する。検出遺構は古墳時代、中・近世の掘立柱建物、土壙、堅穴住居址等である。

七反田遺跡^(註7) 野方・金武線の第5次調査で都地遺跡群第4次調査の北側に位置し、検出遺構は堅穴式住居址4棟、掘立柱建物12棟、土壙・土壙墓12基、河川遺構、製鉄関係遺構5基等である。谷部を挟んで吉武遺跡群となる。

吉武遺跡群の調査

吉武遺跡群は飯盛山場整備事業の事前調査で遺構の在り方が鮮明に成りつつある。

第1次調査(1.2ha)^(註8) 吉武遺跡群第1次調査である。1981年度に調査を行う。弥生時代前期末の金海式斎場墓、中期の斎場墓群(140基)、中期の円形住居址群、古墳時代前期の住居址群、日向川の支流等を検出した。

第2次調査(2.1ha)^(註9) 1982年度に調査した吉武遺跡群第2次調査である。縄文時代後期の貯蔵穴48基、弥生時代後期の溝、掘立柱建物、古墳時代前期から中期にかけての住居址、掘立柱建物、溝等を検出した。中でも韓国系の陶質土器が多量に出土した8区は須恵器しか出土せず、これに反して9区は土師器しか検出しない現象が認められた。

第3次調査(2.5ha)^(註10) 1983年度に調査した吉武遺跡群第4次調査である。弥生時代中期斎場墓200基あまりと桶渡古墳1・2号墳(1号墳は前方後円墳、2号墳は前方後方墳)、古墳の下層から検出した斎場墓には鏡・玉・剣等の副葬品を持ち、墳丘を形成していたことが明らかとなった。

第4、5次調査(3.7ha)^(註11) 1984年度に調査した吉武遺跡群第6・8次調査である。3次調査と同様に弥生時代前期末から中期にかけての斎場墓が250基以上検出され、中でも吉武高木遺跡には、前期末から中期初頭の金海式斎場墓に墓標ともいえる石組が検出された。

また、大型の木棺墓も検出され、棺内には三角縁神獣鏡をはじめ勾玉・管玉・細形銅剣等が副葬されていた。副葬品を持つ木棺墓・斎場墓は区域が限られ、上部構造をもつ。

他に古墳時代前期の溝から模型の船(構造船)や陶質土器等が出土した。遺構は掘立柱建物や

堅穴式住居址等を検出した。

第6、7次調査(2.8ha)^(注12) 1985、86年度に調査した吉武遺跡群第9・10次調査である。吉武大石遺跡(焼棺墓200基の内10数基に銅剣・銅戈・玉等の副葬品を有し、高木遺跡と同様に墓域が設定された焼棺墓群がある。)や太田遺跡第2次調査を行った。また、第2・4次調査から奈良時代から中世にかけての遺構が検出された。特に条里の区割溝等や寺院址、それを取り囲む溝(瓦が多量に出土)が検出された。寺院の可能性とすれば東光寺址か長樂寺址の前身とも考えられる。

吉武遺跡群^(注13) 1985年度に調査した吉武遺跡群第7次調査である。野方・金武線第2次調査である。弥生時代中期から後期にかけての壺棺墓76基が検出された。また、旧河川1条、掘立柱建物1棟が主な検出遺構である。この他古式須恵器、陶質土器、越州窯青磁等の出土遺物が出土しているがこれは、周辺の調査で10数基の古墳や古代寺院の遺構が検出されていることから関係が注目される。

吉武遺跡群I^(注14) 1982年度に調査を行った市道田・飯盛線第1次調査である。吉武遺跡群第3次調査である。調査面積5,200m²である。

第2次圃場整備事業の調査区中央部を東西に寸断する形となった。検出遺構は旧河川1条、掘立柱建物11棟、土壙34基、溝条遺構16条等を検出している。また、古式須恵器や朝鮮式土師器も出土した。時期は弥生時代中期から後期にかけての溝や古墳時代の前期から中期にかけての遺構が主である。

吉武遺跡群IV^(注15) 1984年度に調査を行った市道田・飯盛線第2次調査であり、吉武遺跡群第5次調査である。第1次調査の西側から日向川までの100mを調査した。検出遺構は弥生時代後期の溝1条と古墳時代中期の掘立柱建物11棟、井戸6基、土壙47基、溝状遺構1条等である。遺物の中で注目に値するのは、陶質土器で、吉武遺跡群では必ずといっていいほど出土している。また、初期須恵器が多量に出土していることは吉武高木遺跡、大石遺跡、樋渡遺跡の影に隠れてしまっている感が強いが、弥生時代前期から古墳時代、古代にかけての吉武遺跡群は、非常に注目すべき遺構・遺物が認められる。

太田遺跡群の調査

太田遺跡群I^(注16) 1985年度に調査を行った市道田・飯盛線第3次調査で、田・飯盛線の調査の最終部分である。日向川の西側部分200m、幅20mの調査であったが、東50mは段落ちで日向川の氾濫源であった。また、西側35mも段落ちで遺構は残存していない。中央部115mに掘立柱建物13棟、堅穴式住居址1棟、土壙13基、溝3条等を検出した。

太田遺跡群II^(注17) 1985年度の飯盛圃場整備事業(吉武遺跡群第9次調査、圃場整備6次調査)の一環で遺跡群名の違いから太田遺跡群II次調査とした。遺構は溝状遺構、掘立柱建物、

土壤等が検出された。

太田遺跡群Ⅲ 今回報告する遺跡である。

羽根戸原遺跡群

羽根戸原C遺跡群第4次調査^(註18) 野方・金武線第3次調査で、太田遺跡群とは日向川の支流を挟んで北接する。羽根戸原C遺跡群第4次調査は遺跡群のほぼ中央に南北にトレンチを入れた状態となり、一番遺構の密度が高い部分で北に行くほど遺構の残存状態が良かった。しかし道路拡幅のため調査区が限定され遺構が寸断され、明確にすることが出来なかった。

調査区に検出された遺構は弥生時代中期から後期にかけての竪穴式住居址22棟、土壙30基、掘立柱建物2棟、溝20条、古墳時代・古代の溝8条、弥生時代中期から古代の遺物を含んだ旧河川2条がある。

羽根戸原C遺跡群の調査

第1次調査^(註19) 1983年度農業用水路付替に伴う試掘調査で、弥生時代中期から後期、中世の遺物等が出土した。

第2次調査^(註20) 1984年度中学校建設に伴う調査である。旧石器時代の包含層、縄文時代晚期・弥生時代から古代にかけて営まれた遺跡である。検出遺構は縄文時代晚期の土壙(組織痕のある土器を出土)、弥生時代中期の壺棺墓地、古墳時代後期と律令時代の集落遺構である。

次数	調査番号	遺跡名	事業名	調査期間	調査地名	調査面積	報告
1	8102	吉武遺跡群飯盛遺跡1次	圃場整備1次	1981.11～1982.2	大字飯盛字格	12,000m ²	
2	8234	古武遺跡群飯盛遺跡2次	圃場整備2次	1982.9～1983.2	大字飯盛	21,000m ²	
3	8235	吉武遺跡群Ⅰ	田・飯盛裏1次	1982.9～1983.2	大字飯盛字トイ	5,200m ²	127集
4	8335	古武遺跡群	圃場整備3次	1983.9～1984.3	大字吉武字橋	25,000m ²	143集
5	8415	吉武遺跡群Ⅳ	田・飯盛裏2次	1984.3～1984.5	大字飯盛	1,600m ²	194集
6	8416	吉武遺跡群高木、新光遺跡	圃場整備4次	1984.7～1985.3	大字吉武字高木	36,000m ²	143集
7	8426	古武遺跡群	野方・金武線2次	1985.3～1985.5	大字吉武二十六	1,050m ²	187集
8	8518	古武遺跡群高木遺跡	圃場整備5次	1985.7～1985.7	大字吉武字高木	470m ²	
9	8535	吉武遺跡群大石遺跡他	圃場整備6次	1985.8～1986.3	大字吉武字大石	23,000m ²	
10	8650	吉武遺跡群	圃場整備7次	1986.11～1987.2	大字吉武	5,000m ²	
11	8662	吉武遺跡群10次	野方・金武線7次	1986.3～1986.5	大字吉武字イ	2,300m ²	今年度終
12	8714	吉武遺跡群11次	野方・金武線8次	1987.6～1987.9	大字吉武	1,480m ²	今度終
13	8752	吉武遺跡群	水路建設	1988.3～1988.3	大字吉武	1,000m ²	

Tab. 2 吉武遺跡群調査一覧

番	調査番号	遺跡名	事業名	調査期間	調査地名	調査面積	報告
1	8302	羽根戸原C遺跡	道路建設	1983.12～1983.12	大字羽根戸原	100m ²	
2	8303	羽根戸遺跡	学校建設	1984.2～1984.9	大字羽根戸字幡	24,000m ²	134集
3	8526	羽根戸原C遺跡群Ⅲ	野方・金武線3次	1985.10～1986.4	大字羽根戸字	1,567m ²	188集
4	8528	羽根戸原C遺跡群Ⅳ	道路建設	1985.7～1985.10	大字羽根戸字	3,100m ²	

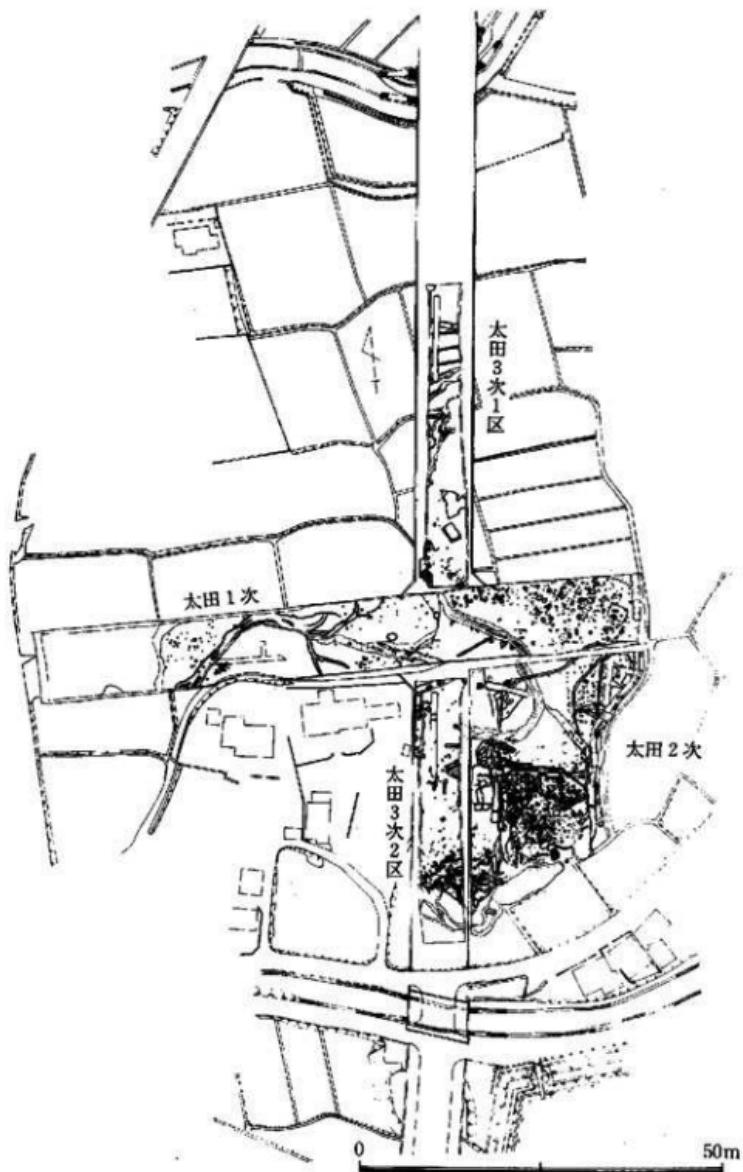
Tab. 3 羽根戸原遺跡群調査一覧

番	調査番号	遺跡名	事業名	調査期間	調査地名	調査面積	報告
1	7418	都地城址	宅地造成	1975.3～1975.4	金武字都地	200m ²	
2	8001	都地南遺跡	道路建設	1980.11～1981.7	金武字都地	8,000m ²	92集
3	8344	都地遺跡3次	野方・金武線1次	1983.6～1983.8	金武字都地	1,500m ²	186集
4	8622	都地遺跡4次	野方・金武線4次	1986.5～1986.7	吉武字都地	2,560m ²	223集
5	8659	七反田遺跡	野方・金武線5次	1986.12～1987.3	吉武字七反田	2,145m ²	223集

Tab. 4 都地遺跡群調査一覧

参考文献及び註

- 註1 福岡市教育委員会「都地遺跡・金武城田遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第186集 1988
 註2 福岡市教育委員会「都地遺跡・金武城田遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第186集 1988
 註3 福岡市教育委員会「都地南遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第92集 1981
 註4 福岡市教育委員会「金武古墳群吉武X郡第8号墳」福岡市埋蔵文化財調査報告書第68集 1981
 註5 福岡市教育委員会「四箇造跡群・夫婦塚古墳群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第51集 1980
 註6 福岡市教育委員会「都地・七反田遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第223集 1990
 註7 福岡市教育委員会「都地・七反田遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第223集 1990
 註8 飯盛・吉武地区廣場整備事業第1次調査1981年に福岡市教育委員会が調査
 註9 飯盛・吉武地区廣場整備事業第2次調査1982年に福岡市教育委員会が調査
 註10 飯盛・吉武地区廣場整備事業第3次調査1983年に福岡市教育委員会が調査
 註11 飯盛・吉武地区廣場整備事業第4・5次調査1984、1985年に福岡市教育委員会が調査
 註12 飯盛・吉武地区廣場整備事業第6・7次調査1985、1986年に福岡市教育委員会が調査
 註13 福岡市教育委員会「吉武遺跡群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第187集 1988
 註14 福岡市教育委員会「吉武遺跡群Ⅰ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第127集 1986
 註15 福岡市教育委員会「吉武遺跡群Ⅳ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第194集 1986
 註16 福岡市教育委員会「太田遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第239集 1991
 註17 飯盛・吉武地区廣場整備事業第6・7次調査1985、1986年に福岡市教育委員会が調査
 註18 福岡市教育委員会「羽根戸原C遺跡群Ⅲ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第188集 1988
 註19 1983年度福岡市教育委員会調査
 註20 福岡市教育委員会「羽根戸遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第134集 1986



第5図 太田遺跡群遺構配置図 (縮尺1/800)

第Ⅲ章 調査の記録

1. 調査の概要

太田遺跡群は福岡市西区大字飯盛地区西側の日向川と支流に挟まれた扇状地、西区大字飯盛字太田に位置する。昭和56(1981)年から飯盛・吉武地区圃場整備事業が開始され、三つの遺跡群がその対象範囲となった。ただ、飯盛遺跡群とした圃場整備事業の第1・2次はその後分布地図では吉武遺跡群に統合されてしまった。日向川を境とし東を吉武遺跡群、西を太田遺跡群とした。

また、西方・金武線は4つの遺跡群に幅16mのトレンチを南北に入れた状況となり、遺跡群の南北端は確認できたが遺跡の全体像をつかむことは出来なかった。

西方・金武線の調査は太田遺跡第3次調査で終了するが、羽根戸原C遺跡群より北の部分は試掘調査の結果、遺構が検出出来なかった。

太田遺跡第3次調査は昭和62(1987)年2月1日から同年4月にかけて調査を行った。

試掘調査の結果、日向川の南側は吉武遺跡群第11次調査の北側台地が急激に落ちる部分に相当し、日向川の氾濫源であり、堆積土も砂層と泥炭層が約2.0m続き、トレンチが崩壊したので下層の掘削を断念し、遺構も検出出来なかつたため遺構なしとの判断を下した。

また、日向川の支流に近い北側部分も支流の氾濫による崩壊が認められ遺構の確認は出来なかつた。以上の試掘調査結果から遺跡の調査範囲を設定した。幅16m、長さ220mを調査対象範囲としたが、すでに田・飯盛線(太田遺跡群第1次調査)の道路が完成しており、その部分を外した長さ200mの3,200m²を調査対象範囲とした。

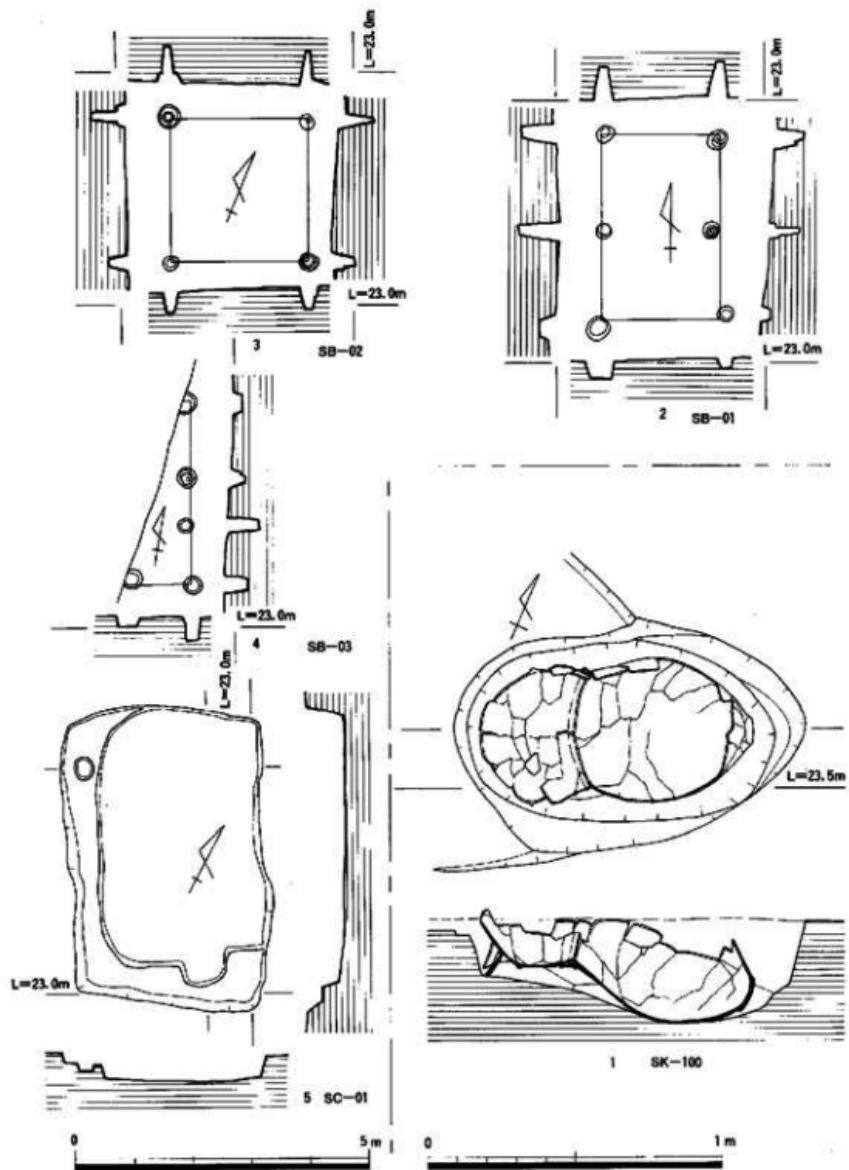
調査地点は飯盛山から東側に広がる扇状地の端部に位置し、日向川とその支流に挟まれた先端部にある。

調査区は田・飯盛線を挟んで北を1区、南を2区とした。

1区は北に行くほど傾斜を持ち、調査区の北から25mの部分は溝を挟んで水田址が広がる。台地には弥生時代後期の壹棺墓、緊穴式住居址(?)、掘立柱建物、古墳時代の溝や水田址等が検出された。

2区は日向川の氾濫源から立ち上がる北岸が検出され、護岸及び水路と考えられる杭列を検出した。時期を決定する明確な資料は出土していないが、ほぼ弥生時代後期から古墳時代にかけての時期が考えられる。遺構面はかなり削平を受けており、遺構の残りは悪い。

また、18世紀の遺構も検出され、瓦や陶磁器等が出土した。陶磁器の中で有田焼と能古焼が区別でき、能古焼の存在が次第に明らかに出来た。



第6図 1区SB-SC-SK造構実測図 (縮尺1/20,1/100)

2. 検出遺構

1区の検出遺構

遺構をのせる地山の傾斜は、南西から北東部に流れる。田・飯盛線第3次調査(太田遺跡群第1次調査)部分の中央部が一番高く、北・南・西に緩やかな傾斜を呈する。特に西側は、緩やかな傾斜をもちらながら谷部を形成している。東側は日向川により急激に落ち、吉武遺跡群との境となる。その距離は、約70m程度である。

1区より検出された遺構は弥生時代後期の甕棺墓1基、掘立柱建物3棟(1間×2間、1間×1間、1+α間×3+α間)、竪穴式住居址(?)1軒、溝状遺構2条、水田址1面である。水田址を除いて全体的に削平を受けており甕棺墓の上甕、竪穴住居址の壁面等は約0.3m～0.5m程度高かったと考察できる。

SK-100甕棺墓(第6図-1、PL. 5)

1区南西隅より検出した。SD-01により切られている。上甕の約半分が削平を受けている。方位はS-67°-Wを持ち、傾斜角度21度を測る。上甕は、大型壺形土器(第15図-43)で頸部と胴部中位下に「コ」の字状突帯を巡らし、底部は僅かに平底が残るタイプである。下甕は「く」の字口縁で頸部に一条の三角突帯を巡らす。底部は平底の大型壺形土器(第15図-28)である。土器形式から弥生時代後期終末期に位置付けられる。このほかにも大型壺形土器片が認められるところから周囲部に甕棺墓の可能性が考えられる。

SB-01～03 掘立柱建物(第6図2～4、PL. 1, 3)

1区で検出された掘立柱建物は3棟である。SB-01は、1間×2間で桁行2m、梁行3.1mである。ただ南側の柱穴が浅く、中央・北側の柱穴が深い状態である。これは柱穴の深さから考えると1間×1間の建物の可能性が高い。方位はほぼ磁北である。

SB-02は1間×1間の掘立柱建物であるが壁面が削平された竪穴式住居址の可能性もある。方位はN-67°-Eで柱間2.4mを測る。SB-03は一部調査区外のため全容は明らかではないが、1間×3間か2間×3間の掘立柱建物であろう。柱間1.2m間隔で一部狭い部分がある。方位N-80°-Eを測る。

竪穴式住居址(?) SC-01(第6図-5、PL. 3)

竪穴式住居址(?)としたのは主柱穴が認められないことと、住居址周辺部にも柱穴がまったく検出出来なかったことで、住居址としての可能性よりも竪穴として考えておきたい遺構であるが、周辺にベット状遺構を配することから竪穴式住居址(?)とした。最近、このような例も増加している。長軸が5m、短軸が3.3m、深さ0.4mを測る。出土遺物は細片ばかりで時期を決定する資料に足りないが、土師器片の出土から古墳時代前半と考えられ、溝・掘立柱建物と

同時期と考えたい。

溝状遺構（付図-1、PL. 2~9）

SD-02 田・飯盛線3次調査(太田遺跡1次)のSD-03と同一溝と考えられる。第1次調査で台地を切斷した溝は、台地の端部にそって流れ、台地と水田区画溝となる。

台地上では、第1次調査のSD-07との間連も考えられるものであるが、調査区の限定で定かることは不明である。幅2~4mを保ちながら水田址南側まで達するがそこで東西に分岐する。この分岐点までの長さ20mを測り、東西の長さ(調査区の幅に限界があるため調査区外の方向、長さ、幅等は不明)9.5mである。分岐点部分は「S」字状を呈し、中央部には一段と下がった部分が認められ、これは、水の流れが急激に変わったことを物語っている。また、中央部分と北側対岸に多量の土器が出土(11図-1~6他)した。途中で東方向に流れる一条の溝があるが、これは途中で切れる。水田址の形跡は明らかには出来なかったがおそらく水田址の取水口であろう。

SD-03 SD-02の分岐点「S」字状部分の台地上に西から東に細長い窪みをSD-03とした。出土遺物はまったくないが同一レベルからの検出から考えて同時期かそう離れた時期ではない。

SD-04 水田址の北側に水田と並行に東西溝がある。水田址に伴う溝で排水溝と考察できる。幅1.8m、深さ0.4mを測る。

水田址（付図-1、PL. 2）

1区台地落ち部分から検出した。試掘調査の結果、水田らしき遺構が存在するとの報告を受け土層の堆積状態から水田址の検出が可能と判断し、調査を行った。

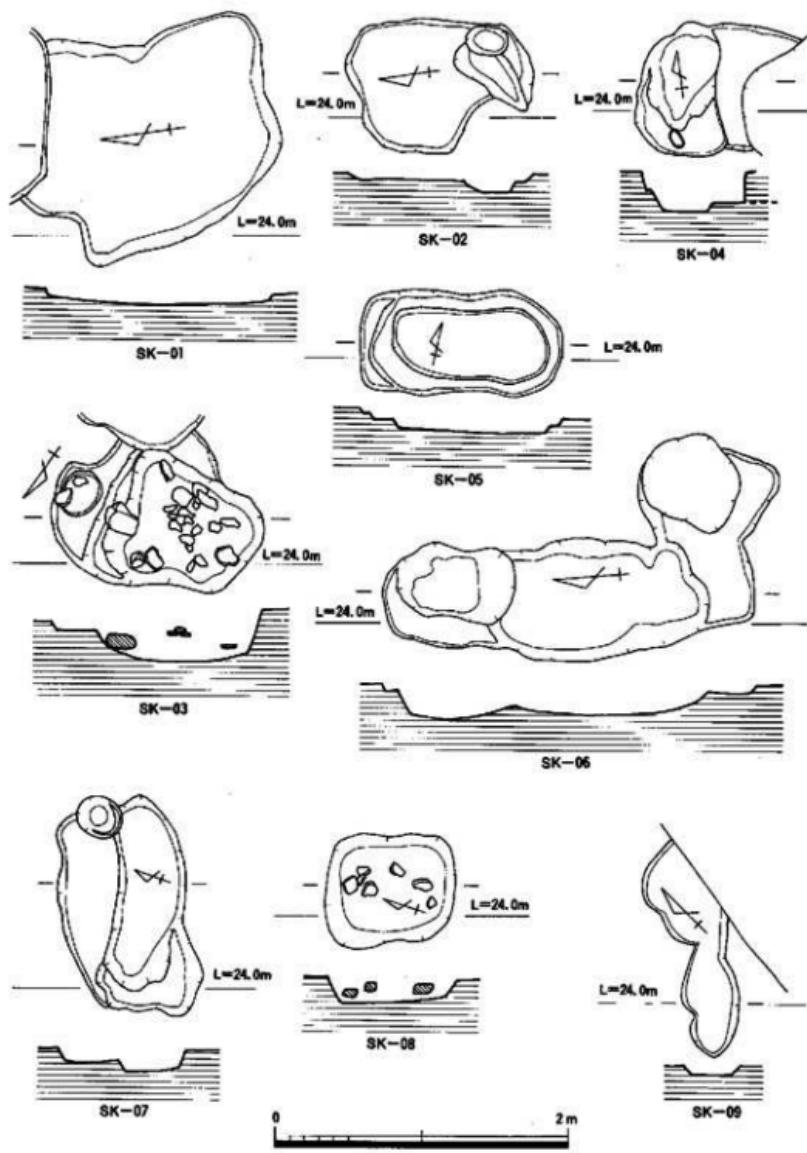
SD-02の溝を境に水田面を検出した。上面に砂の堆積が認められ、畦畔も東西に検出した。北側は調査区外で急激に落ち、水田耕作は行われておらず日向川支流の氾濫源であった。

水田一枚の大きさは、東西の畦畔が明らかでないが調査区内での計測では南北約31.5m²、45m²、40.5m²である。このほかに断面観察によると3~4面の水田面が観察されたが、砂の堆積が認められないものや砂の堆積があるにもかかわらず畦畔の検出が出来なかったため最下層の水田址の検出を行った。

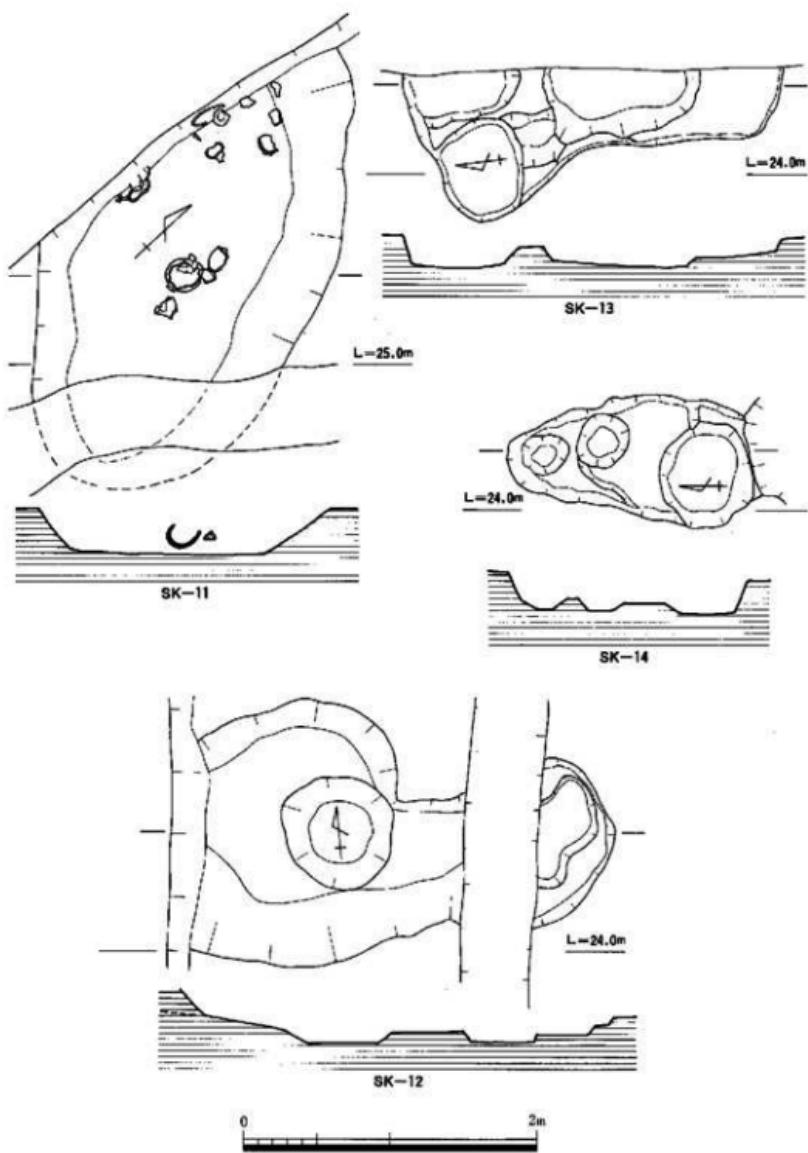
2区 検出遺構（第7図~10図、PL.11~15）

2区は1区と異なり削平が著しく遺構の遺存状態は極めて悪い。ただ西側人家隣接部分にはまだ旧地表面(これも多少削平を受けている)が残っていた。この部分から削平され水田として現代まで利用されていた。これは遺構検出時に明確に観察出来た。

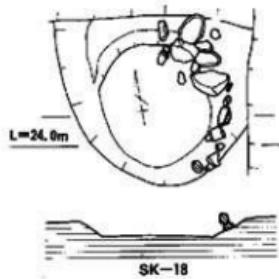
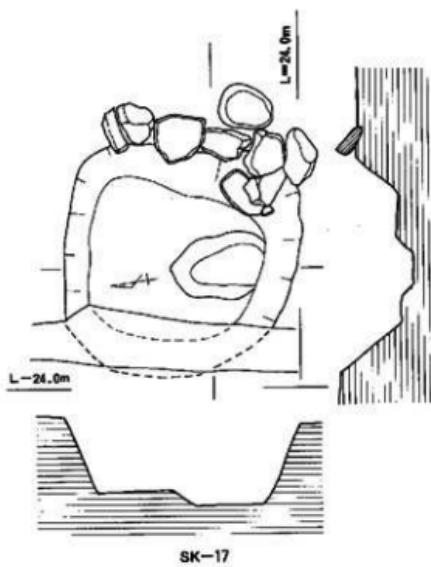
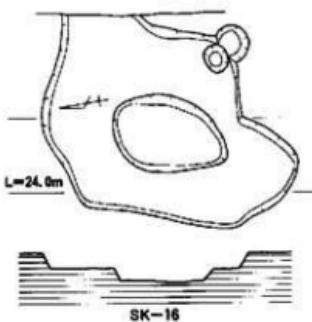
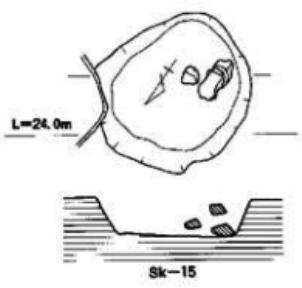
土壤（SK）（第7図~9図、付図-2）



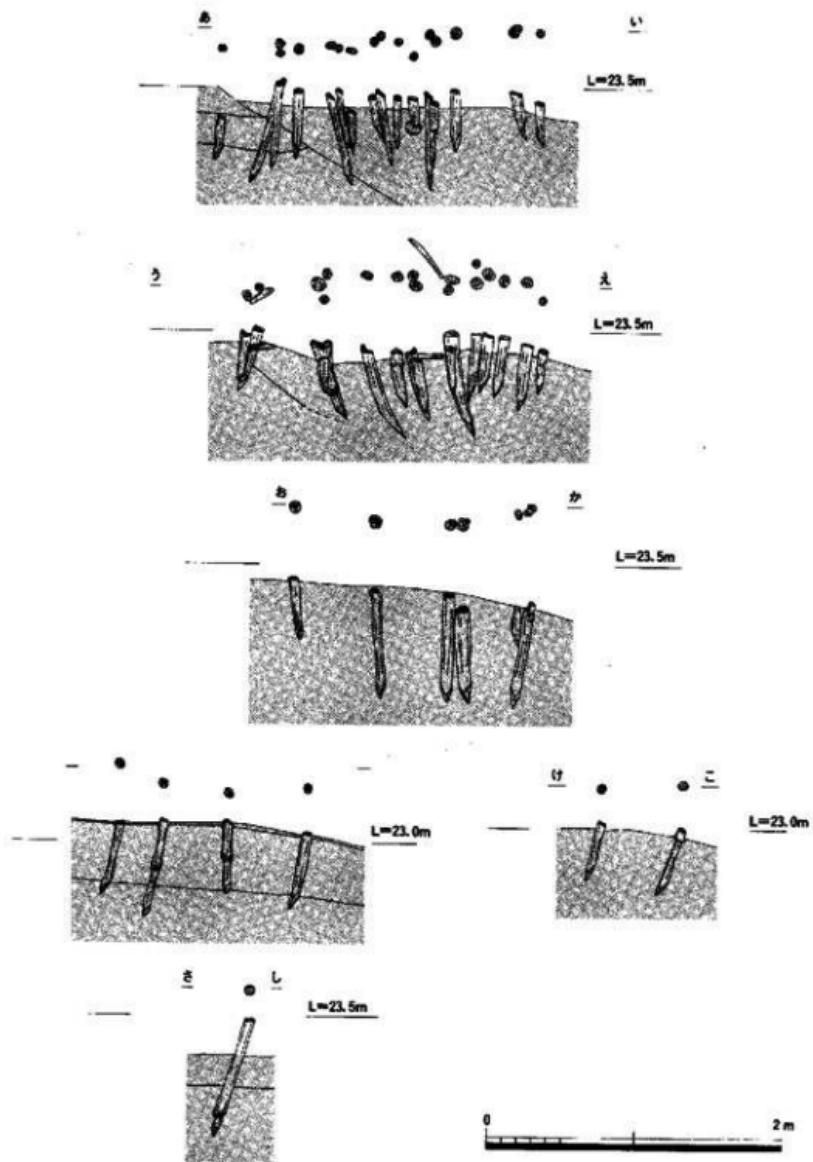
第7図 2区SK遺構実測図-1 (縮尺1/40)



第8図 2区SK遺構実測図-2 (縮尺1/40)



第9図 2区SK造構実測図-3 (縮尺1/40)



第10図 2区抗列尖端圖（縮尺1/40）

性格不明の土壤や石・遺物を僅かに包含する土壤等がある。形状は楕円形、不整形なもの、切り合ひ関係が多いもの等さまざまである。ただ石等を敷き詰めた土壤(SK-03, 08, 15)も検出した。

SK-11(第8図、付図-3, PL.13, 14) 西側境界に接する遺構で調査区は著しく削平を受けていたが、旧地表の残る部分からは遺構内より弥生土器が出土した。遺構が区域外に入るため全容は不明であるが楕円形の形状を呈する土壤と考察出来る。現在長 $2.6 + \alpha$ m、幅2.1m、深さ0.3m、断面からの観察による深さ0.6mを測る。出土遺物から弥生時代後期の時期である。

SK-17, 18(第9図、付図-2 PL.12, 14)

近世の土壤状遺構である。SK-17は土壤外部に円礫を配し、二段に掘込んでいる。ほとんどの円礫は火を受けた痕跡があるが、土壤自体は火の痕跡は無い。断面から表土下すぐに掘り込まれている。出土遺物は近世(18世紀後半)の陶磁器片があり、太田1次調査にも同時期の遺構、遺物を検出しているし、吉武11次調査(日向川の南側対岸)でも構内より同時期の陶磁器が出土している。これらのことから18世紀後半の遺構であろう。

SK-18も浅い皿状の掘方を持つ。土壤内部に配石が認められる。時期は17と同時期で18世紀後半の陶磁器が出土している。

土壤・掘立柱建物・竪穴式住居址の計測を一覧表とした。

土壤番号	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	遺物番号	時期
SK-100	1.6	1.4	0.1	1028, 1043	弥生後期
SK-01	1.6	0.9	0.1		18世紀後半
SK-02	1.3	0.9	0.1		18世紀後半
SK-03	1.45	0.9	0.35		18世紀後半
SK-04	0.9	0.7	0.27		18世紀後半
SK-05	1.4	0.68	0.12		18世紀後半
SK-06	2.55	0.85	0.2		18世紀後半
SK-07	1.5	0.9	0.15		18世紀後半
SK-08	0.9	0.8	0.19		18世紀後半
SK-09	1.5	0.4	0.08	1032, 1033	弥生後期
SK-11	$2.6 + \alpha$	2.1	0.3	1021, 1031, 1034, 1035, 1036, 1037, 1038, 1039, 1040	弥生後期
SK-12	2.8	1.8	0.28		18世紀後半
SK-13	1.1	$0.5 + \alpha$	0.2		18世紀後半
SK-14	$1.65 + \alpha$	0.9	0.25		18世紀後半
SK-15	1.1	1.08	0.26		18世紀後半

Tab. 5 土壤・掘立柱建物・竪穴式住居址一覧

土壤番号	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	遺物番号	時期
SK-16	1.56	1.4	0.2		18世紀後半
SK-17	1.6	1.6	0.6		18世紀後半
SK-18	1.1+a	1.2+a	0.18		18世紀後半
SX-100	1.1+a	1.6	0.55	4001,4002,4003,4004,4005,10009	18世紀後半
SC-01	5	3.3	0.4		古墳時代前半
SB-01	2×1.6×1.5				古墳時代前半
SB-02	2.4×2.4×-				古墳時代前半
SB-03	1.2×0.9×1				古墳時代前半

Tab. 5 土壙・掘立柱建物・堅穴式住居址一覧

杭列遺構 (第10図、付図-2、PL. 15)

2区の南側に段落ち部がある。これから南は日向川の河川と考えられ、古武11次との境に日向川が流れている。これを SD-01とした。段落ち部分に杭列を検出した。台地の縁部には直角に配列するところから護岸とは考えにくく、また水口とも考えにくい。水辺までいく橋ゲタ的なものかもしれない。杭は砂礫部分に打ち込まれたものとシルト層に打ち込まれたものがあり、現長0.5-1.0mですべて丸杭であった。密集する場所で17本程度である。

土層 (付図-1、PL. 10, 13, 14)

1区の上層

標準土層は I層…耕作土 II層…暗黒褐色土 III層…小石混じりの黒褐色土 IV層…茶褐色土 V層…鉄分を多く含んだ黄褐色土 VI層…褐色土 VII層…炭化物を含む暗灰褐色土 VIII層…砂質の強い灰褐色土 IX層…灰褐色土 X層…黒褐色土 XI層…青灰色シルト XII層…砂礫層 XIII層…砂層である。水田とした層は VII層の褐色土と XI層の青灰色シルトで同一レベルにあり、上層を砂層で覆われていた。上層にも2ないし3面ほど水田面を観察出来るが、平面的に捉えることはできなかった。

2区の上層

標準土層は I層…耕作土 II層…褐色土 III層…茶褐色土 IV層…明茶褐色土である。

3. 出土遺物

1区、2区から縄文時代、弥生時代、古墳時代、近世の遺物がいろいろな遺構から出土している。遺物に関してはそれぞれの遺物に登録番号を付した。縄文土器が00001から、弥生土器が01001から、古墳時代の土器を02001から、陶磁器等が03001から、瓦等が04001から、石器が10001からの番号で始めている。

土 器

1区出土の土器

縄文土器（第13図1～5, PL.18）

1～5は第1区 SD-01砂層より出土した縄文後期粗製深鉢形土器口縁部である。全面に荒い条痕を配している。胴部を含めると17点出土した。すべて二次堆積の遺物である。

弥生式土器（第11図～15, 17, 18図, PL.16～18）

弥生時代の土器は中期から後期まである。

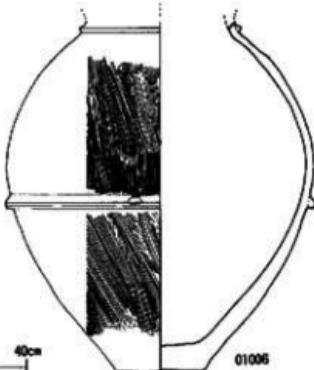
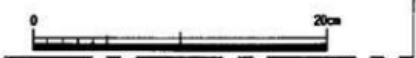
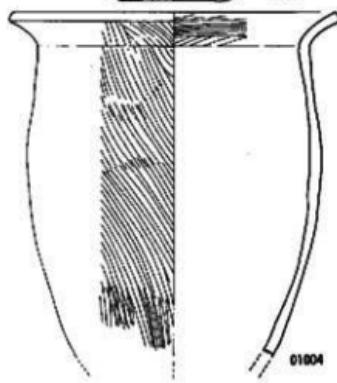
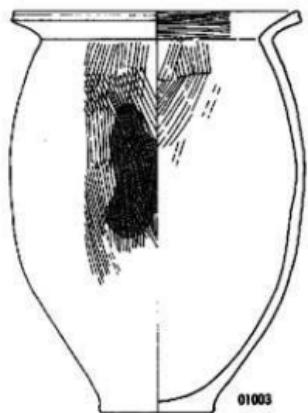
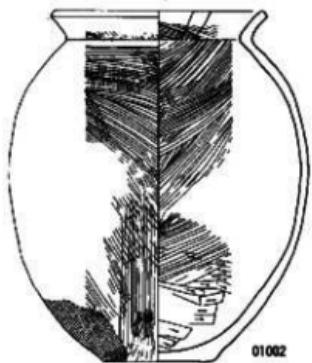
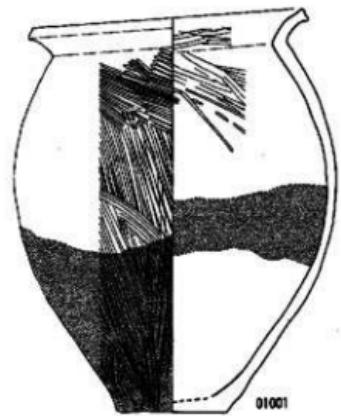
弥生中期の土器は01019, 01025の2点である。01019はL字口縁で、口唇部がやや下りぎみの壺形土器である。

01025は壺形土器の底部である。端部が鋭角に作り出されており、やや上げ底である。器面調整は底部端まで刷毛目調整を丁寧に施している。19.20はSD-02からの出土である。

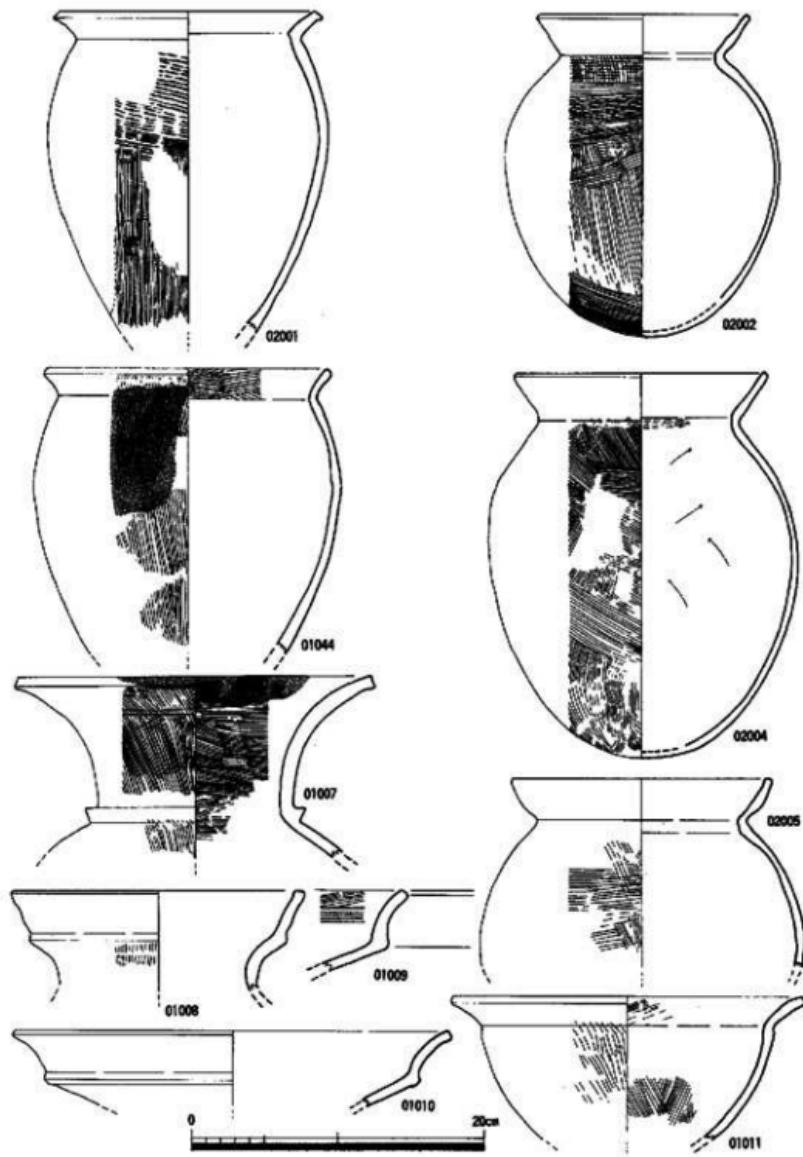
弥生時代後期の土器（第11図～16図, PL.16～18）

01001～01004は壺形土器である。1は頸部から口縁にかけて外反するが口縁端部でさらに外に開く「く」の字を呈する。口唇部に指押さえのため棱を有する。最大径は胴部中位にあり、底部は平底で、端部の縫まりは甘い。器面調整は荒い刷毛目で、一部叩きと思われるカキ目が認められる。内外面に黒斑が認められ、口径18.2cm, 器高26.2cm, 底径7.6cm最大径22cmを測る。2は器形的には頸がはり、口縁部が短い形状を呈する。口縁部が「く」の字を呈し、胴部中位に最大径を持つ。底部は平底で端部の造りは甘い。器面調整は縱、横の細かい刷毛目を施す。口径14cm, 器高24cm, 底径7.5cm, 最大径20.5cmを測る。3は最大径が口縁部にあり、1と同様な口唇部を呈する。胴部は張らずに立上り頸部から口縁部にかけて強く外反する。底部は平底で、端部の造りは丁寧である。内外面とも縦、横の刷毛目調整を施す。口径19.4cm, 器高27.5cm, 底径7.5cm, 最大径20cmを測る。

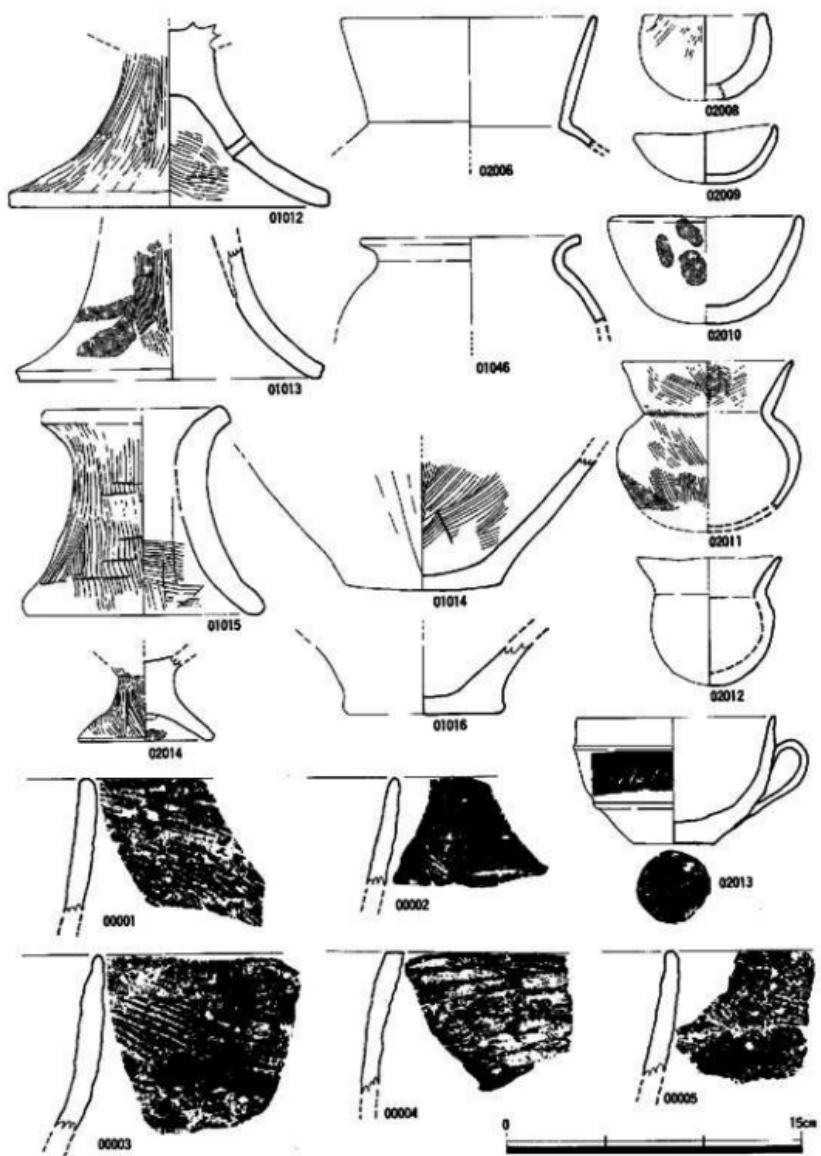
4は3よりも底部からの立上りが垂直に近く、頸部の縫まりも殆どない。頸部から口縁部にかけて縦やかに外反する如意形を呈する。1～3までの頸部内面には明らかに棱を有するが、



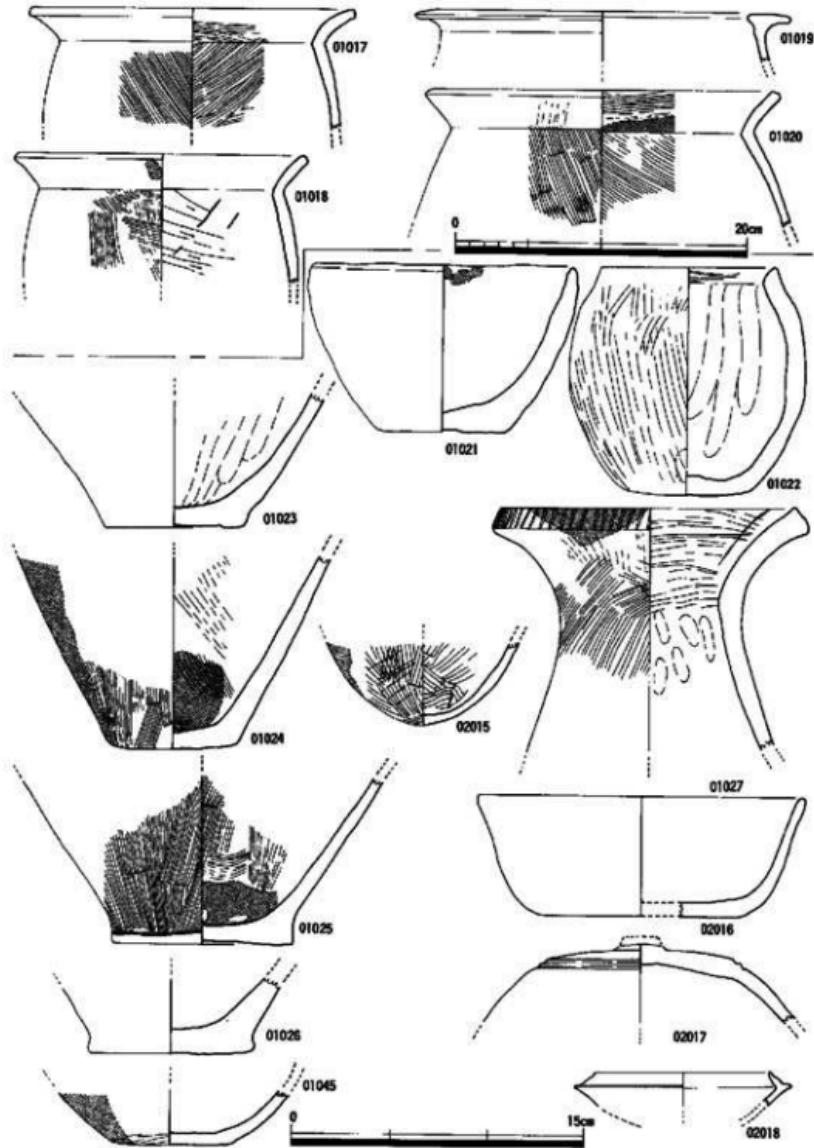
第11図 1区出土土器実測図－1 (縮尺1/4,1/8)



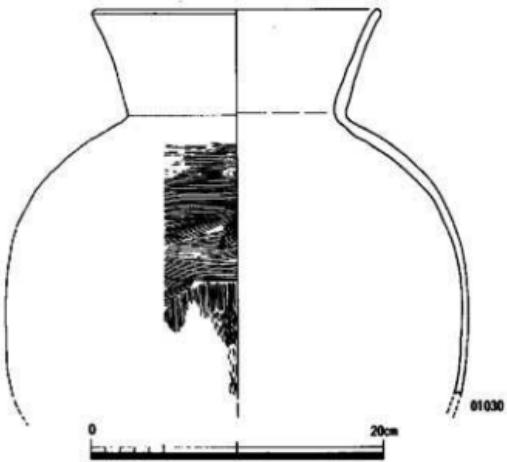
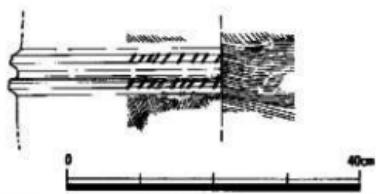
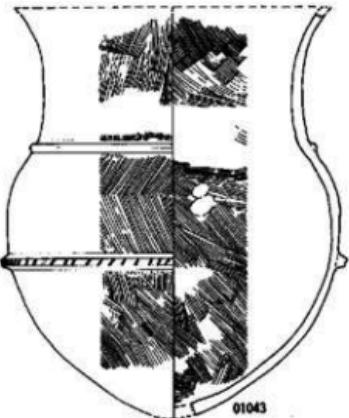
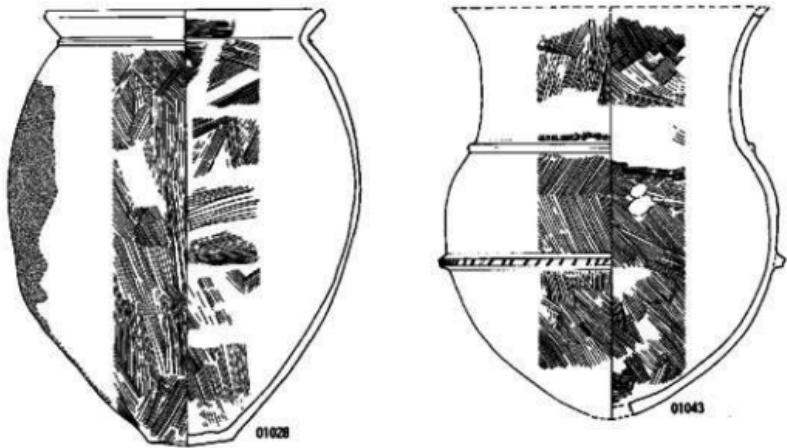
第12図 1区出土土器実測図-2 (縮尺1/4)



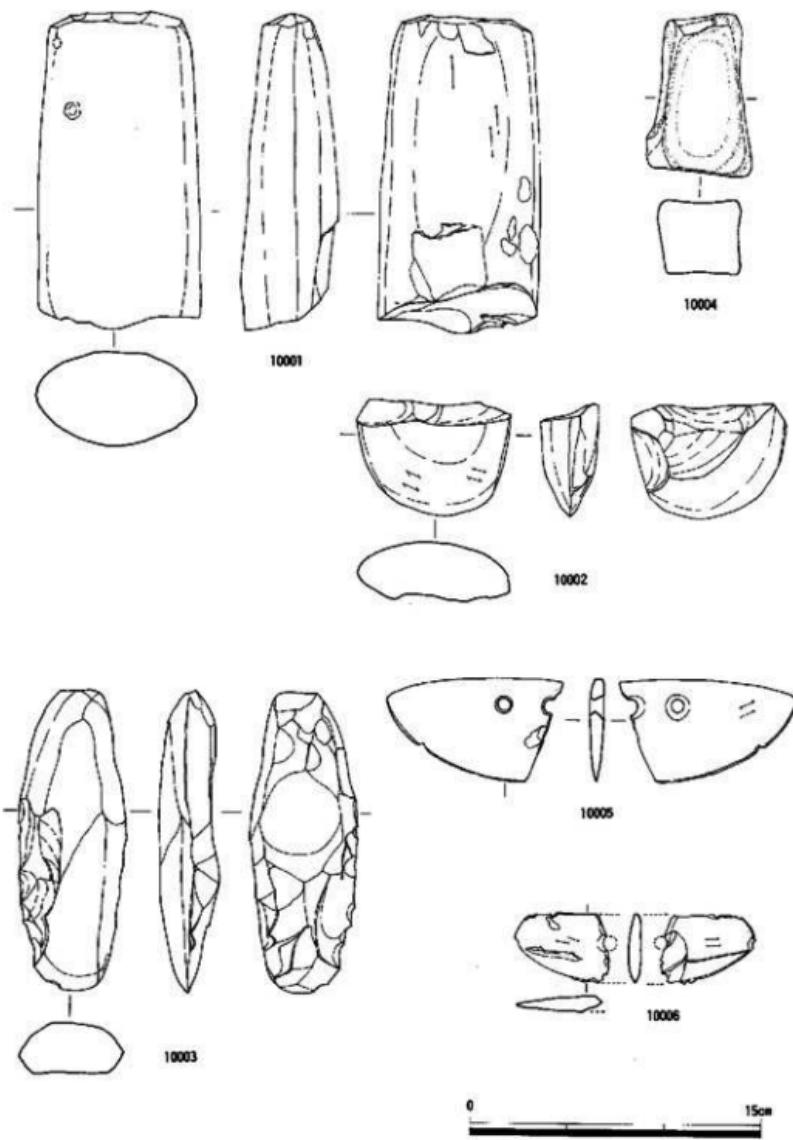
第13図 1区出土土器実測図-3 (縮尺1/3)



第14図 1区出土土器実測図-4 (縮尺1/3.1/4)



第15図 1区出土土器実測図-5 (縮尺1/4,1/8)



第16図 1区出土石器実測図 (縮尺1/3)

4ではその境界がない。最大径は口縁にあり、器面調整は荒い刷毛目を施す。底部は不明。口径21.8cmを測る。

01005, 01006はほぼ同一個体と考えられるが、接点がないため別々に図示した。5は口縁部が鋸先状を呈するもので口縁部の内唇部が下がるタイプに属する。口径40cmで内外面とも刷毛目調整を施す。6は頸部が綻まりその部位に三角突帯を巡らす。器面はナデと細かな刷毛目で縦方向を主体としている。最大径42cm、現存長47cmで底部は平底である。

01007の頸部は綻まり、この部位に三角突帯を配し、やや外反しながら直線的に立上りながら中央部でさらに大きく外反する如意形口縁を呈する壺形土器である。脚部下は欠損している。内外面とも細かな刷毛目で器面を仕上げている。口径24cmを測る。

01008は壺形土器の口縁部で袋状口縁土器である。口縁部が内湾するのではなく外反しながら立ち上がるタイプで口径20cmを測る。1~8はすべてSD-02からの出土である。

01009, 01010はSD-02の下層より出土した高壺形土器である。脚部等は欠損して無いが、10は口径29.6cmを測り、9もほぼ同径である。

01011は底部を欠損する鉢形土器である。内面は細かな刷毛目調整を施す。口径23.8cmを測る。01012は高壺形土器の脚部である。外面は荒い刷毛目調整を施し、孔を四個配する。脚部径16.4cmを測る。01011, 01012の出土地点はSD-02下層からである。

01013, 01015, 01027は器台である。13は脚部のみ、27は皿部のみ、15は完形品である。SD-02からの出土で、13の底径15.3cm, 27は11径15.2cm, 15は底径11.8cm、口径8.9cmを測り、口縁に刻み目を配する。13, 15, 27はSD-02出土である。

01014, 01016は壺形土器の底部である。14は底部中央がやや膨らみを持つ。14の底径8cm、16の底径7.7cmを測り、両方ともSD-02からの出土である。

01017~01020は壺形土器である。19は「T」の字口縁を呈し、口唇部がやや下がりぎみである。口径21.2cmを測る。17, 18, 20は「く」の字口縁を呈する壺形土器で、3点とも細かな刷毛目調整を施している。17, 19がSD-02、20がSD-04から出土した。

01021, 01022は手捏土器である。器厚があり仕上げも粗雑である。21は口径13.2cm、器高8.5cm、底径6.4cm、22は口径9.0cm、器高11.7cm、底径6.5cmを測る。SD-02の出土。

01023~01026は壺形土器の底部である。23~25はSD-02からの出土、26は水田址より出土。

01028, 01043は壺形土器(SK-100)の上壺と下壺である。下壺が28、上壺が43である。28は「く」の字口縁で頸部に一条の三角突帯を巡らす。43の口縁部は打ち欠いているが、如意形に開く口縁で、頸部と脚部下位に「コ」の字突帯を一条ずつ巡らし、下位の突帯には刻み目を施す。28は口径37cm、器高60cm、底径11.5cmで、43は口径43.2cm、器高56.5cmを測る。

01029は表土から採集した大型壺形土器の頸部である。最大径の頸部に刻み目を配する二条

の「コ」の字突帯を巡らす。

01030はPit-100より出土した壺形土器の口縁部である。頸部に刷毛目にて器面調整を施す。頸部がしまり、胴部は大きく膨らむ。口縁部は頸部から外反しながら垂直に立上り口唇部で僅かに外反し納めている。口径16.1cmを測る。

01046は壺形土器の口縁である。口径が11.4cmである。SD-02上面からの出土である。

01045は底部である。底部にタクキ痕を残す。

土師器（第12図、14図、PL. 16, 18）

02001～02005は壺形土器である。内外面に叩きの痕跡が残り、底部は丸底を呈する。口縁は「く」の字口縁を呈する。02001の口径17.3cm, 02003が口径19cm, 02002の口径14cm, 器高21.8cm, 02004が口径16.9cm, 器高26.8cmを測る。すべてSD-01上面からの出土である。

02006は壺形土器の口縁である。6は口縁部がやや外反しながら垂直に立上るタイプ、7は口縁部が短く大きく外反し端部を丸く納めるタイプである。6の口径は13.0cmを測る。

02008～02010は手捏上器である。これもSD-01上面からの出土である。

02011, 02012は小型丸底壺で11の口径8.7cm, 12の口径7.4cmを測り、器高は11が8.3cm, 12が6.6cmである。

02016は土師器碗である。口径16.6cm, 器高6.1cmを測る。

02015は底部である。

須恵器（第13図、14図、PL. 17, 18）

02017, 02018は壺の蓋と身である。両方ともSD-01上面からの出土である。

02013は把手付楕で、文様形態、器形から陶質土器（韓式土器）と考えられる。古武遺跡群、古武古墳群から多量に出土していることからもこれもその1点と考えられる。口径10cm, 器高6.5cm, 底径4cmを測り、SD-01上面からの出土である。

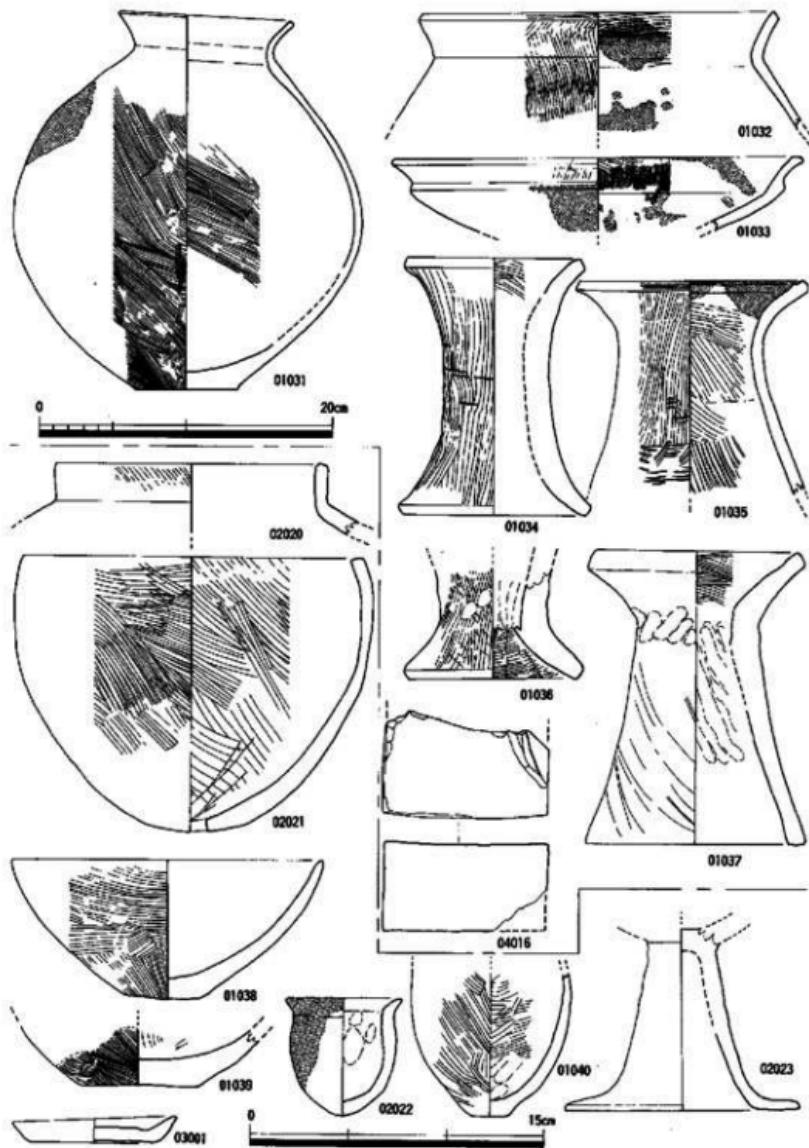
2区出土の土器

弥生式土器（第17図、18図、19図、PL. 19, 20）

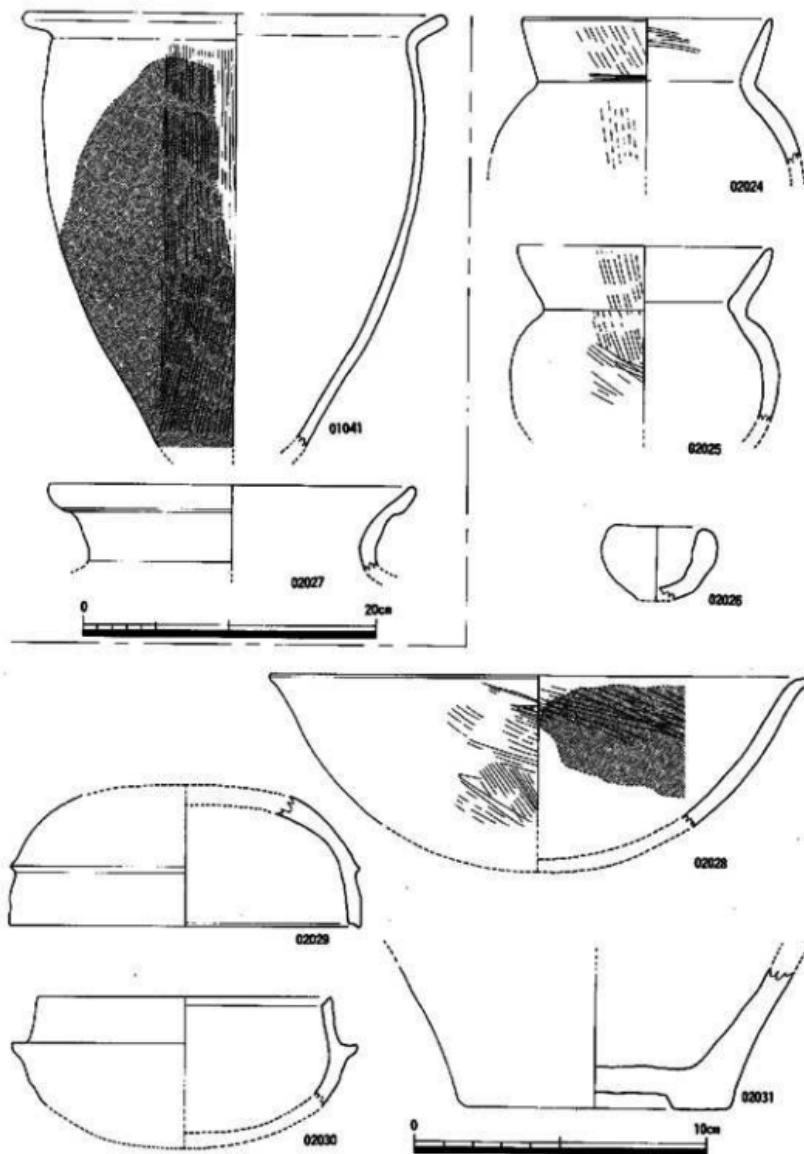
弥生式土器は壺形土器、壺形土器、鉢形土器、高壺形土器、器台等が出土した。土壤より出土したものが殆どであり、わずかにPit内より出土した。

壺形土器（第17図、18図、PL. 19, 20）

01032, 01040, 01041, 01042がある。32, 41は「く」の字口縁を呈するタイプのもので、32は口径24cm, 41は28cmの口径を測る。40は口縁部が欠損しているが、ほぼ同じ形態を呈するも



第17図 2区出土土器実測図-1 (縮尺1/3, 1/4)



第18図 2区出土土器実測図-2 (縮尺1/2,1/4)

のと思われる。42は底部に穿孔を施しているもので、底部が高台状となることから、瓶としての用途が考えられる。32はSK-09、40はSK-11、41、42はSX-01より出土。

壺形土器（第17図、PL. 19）

01031、01039の二点がある。両方ともSK-11からの出土で、31の口径は11.6cm、底径7cm、器高25.5cmを測る。

鉢形土器、高壺形土器、器台（第17図、PL. 19）

01038は鉢形土器でSK-11からの出土で、口径16cm、底径3.8cm、器高7.2cmを測る。

01033は高壺形土器で、脚部は欠損している。口径27.6cmを測り、SK-09より出土している。

01034～01037は器台である。すべてSK-11からの出土である。

古墳時代の土器（第17図、18図、PL. 18～20）

土師器・須恵器（第17図、18図、PL. 18～20）

壺形土器として02020、02022、02024、02025の四点がある。02020は口縁が垂直に立ち上がる広口壺である。口径14cmでPit-21から出土した。

02022はPit-19より出土した壺形土器である。口径6cm、器高6cmを測る。

02024は口縁部がやや外反し垂直に立ち上がるタイプである。02025は「く」の字口縁を呈するもので、丸底壺的要素を持つ。口径は02024が8.5cm、02025が8.6cmでSX-01からの出土。

02026は手捏土器である。SX-01からの出土。口径3.2cm、器高2.5cmを測る。

02021は鉢形土器の瓶で底部に穿孔がある。SK-11より出土した。口径17.2cm、器高14cmを測る。内外面は刷毛目調整で仕上げている。

02028は鉢形土器である。叩きの後、刷毛目調整で器面調整を行っている。SX-01から出土したもので口径18.4cmを測る。

02023はPit-01から出土した高壺形土器の脚部である。脚部径は12cmである。

02029、02030はSX-01から出土した壺の蓋と身である。02029は口径12cm、器高4.4cmを測る。02030は口径10cm、器高推定3.7cmを測る。

近世陶磁器（第19図～21図、PL. 20, 22）

近世陶磁器は太田遺跡群や吉武遺跡群から数多く出土しているが、特に太田遺跡群第1次、吉武遺跡群第11次から遺構と共に出土している。

陶磁器は碗類、皿、蓋、瓶、手付瓶等が2区のSK-17, 18、SX-100、Pitより出土した。陶器と磁器とに種別出来る。

磁器（第20図、21図、PL. 20, 21）

伊万里系染め付け磁器には肥前系と能古焼があり、器種には碗、皿がある。肥前系と能古焼の区別は明確でない。しかし能古窯跡の発掘調査で、その実態が明らかとなり、その報告

が待たれる。

肥前系碗（第20図、21図、PL. 20, 21）

肥前系碗には第20図-03009、13、14、16、17、19の6点がある。03009は白磁に藍色の基調で、装飾技法としてはいわゆるコンニャク判を使用している。五弁の花文を7個配し、下端にし、1を基本とする紋様を配する。高台には二本の紋様を配し、端部を軸の搔き取りいわゆる蛇ノ目高台軸ハギを行っている。内面の紋様は線描きと花心、鳥をあわせた紋様がある。またハリ支え痕が認められる。器形は底部からすぐに立上り、口縁部まではほぼ垂直に立ち上がる。端部を丸く納めるタイプである。03013も03009と同様の器形を呈する。外面は全体に淡い藍色を含んだ乳白色を呈する。紋様は下段に「月」、「秀」等を5個配する。高台には一本の紋様を配し、端部を軸の搔き取りを行っている。03014は内外面に乳白色の軸をかけ、紋様は藍色を呈する。高台の造りが03013と03009とも異なりやや外に外反し高台自体も高い。03020の装飾技法は梅の花のつぼみを思わせる絵柄で手書き紋様である。色調は淡い藍色を含んだ乳白色を呈し紋様は藍色で描かれている。03029は白磁系の色調を呈し、強い藍色で文様を描いている。全面に軸をかけるが、高台端部は剥ぎ取ってある。内面にはハリ支え痕跡が認められる。

染付皿 03016は外面乳白色を呈し、蛇ノ目凹形高台を持つ。内面には胎土と思われる痕跡を残す。絵柄は中国風のもので藍色で紋様を構成している。03017は口縁が波状口縁で端部に口錆を施している。外面が乳白色を呈し、内面は藍色を基調とした絵柄で構成されている。

03018は大皿である。外面は乳白色を呈し、底部にハリ支え痕跡を持つ。内面は藍色を基調として中国風の風景画を描いている。

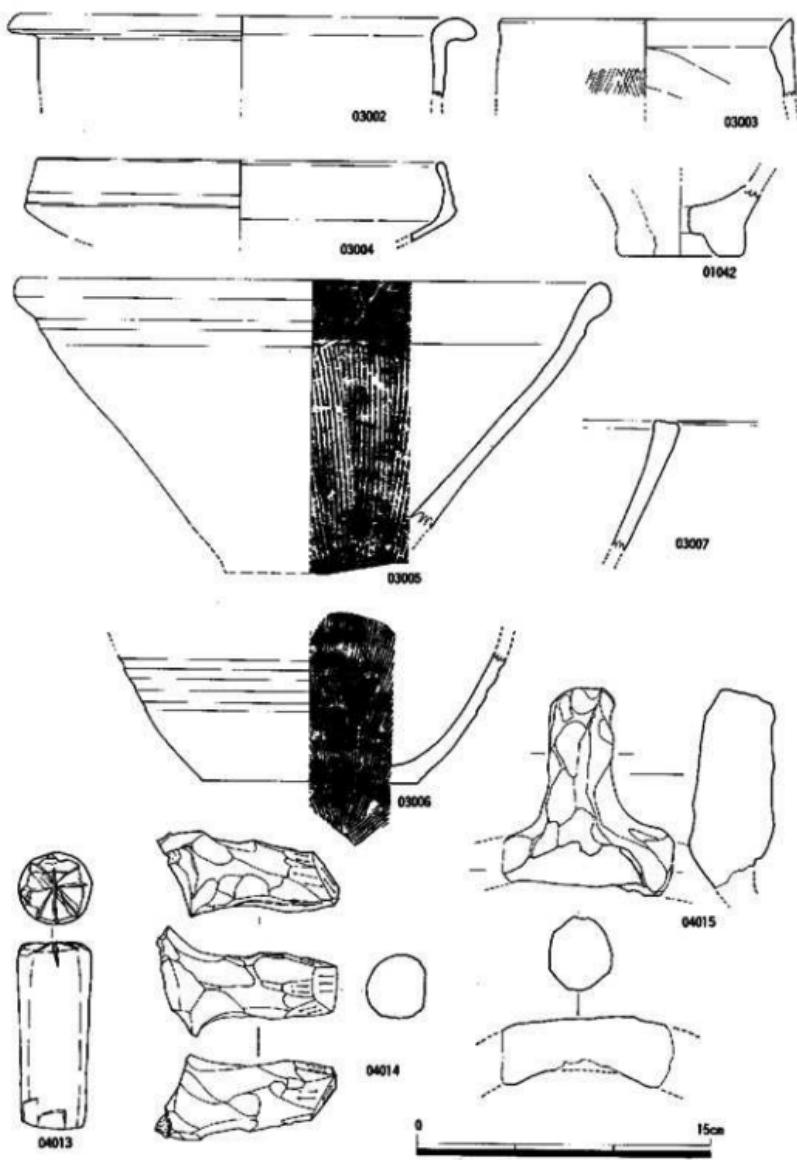
能古焼 03008、03028の二点がある。03008は皿で見込みに五弁花文のコンニャク判を使用している。外面は鶯色の軸で仕上げ、高台内面に満福を描く。03028は軸の発色が悪く気泡も多い。内外面とも乳白色を呈し、見込みに昆虫紋様を配する碗である。

陶器（第20図、21図、PL. 21）

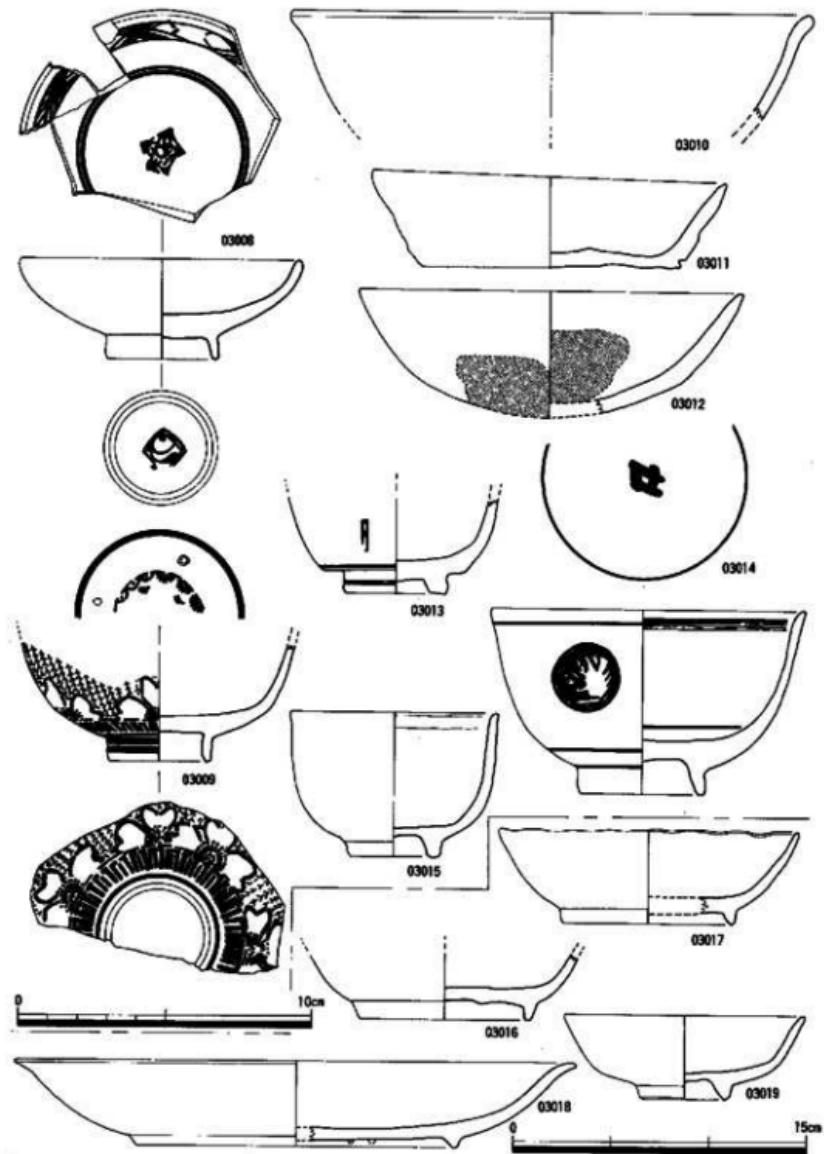
陶器としたものは唐津系陶器と能古焼（？）である。03019、03021、03023、03024、03025、03027、03031、03032の8点が唐津系陶器で、03015、03022、03033の3点が能古焼（？）と考えられる。能古古窯跡からは陶器も沢山焼かれており軸自体の発色も非常によく似ている。

瓦（第17、19、22、23図、PL. 22）

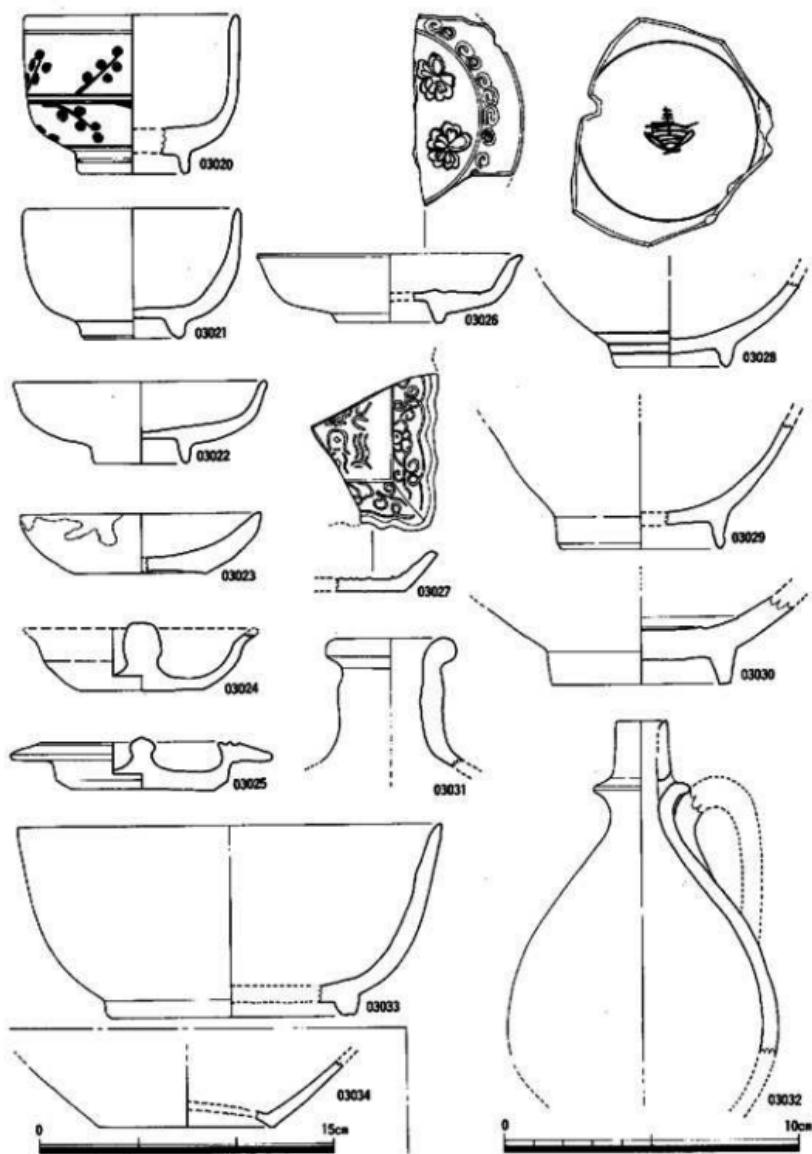
17-04016は埠である。2区Pit-3より出土した。22-04001～04006は平瓦である。近世瓦の形状を良く留めている。19-04013は「*」印が刻まれている棒状の刻印である。瓦質でその用途は不明である。23-04007は軒平瓦の上部破損したもので、紋様は均等唐草紋と考えられる。04008は軒丸瓦でこれも下部を欠損する。瓦当中央に巴紋を配し、縁部に蓮子24個を配する。瓦当紋様の彫りは深い。04009、04010は丸瓦である。04010は玉縁付丸瓦である。



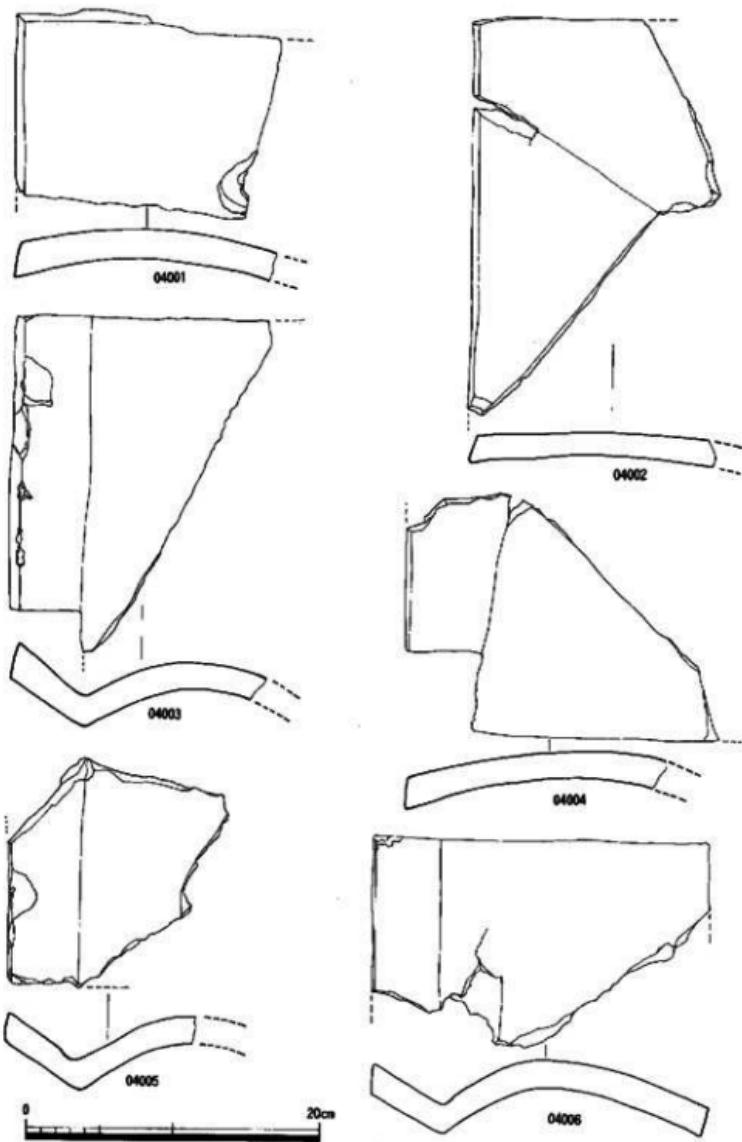
第19図 2区出土土器実測図-3 (縮尺1/3)



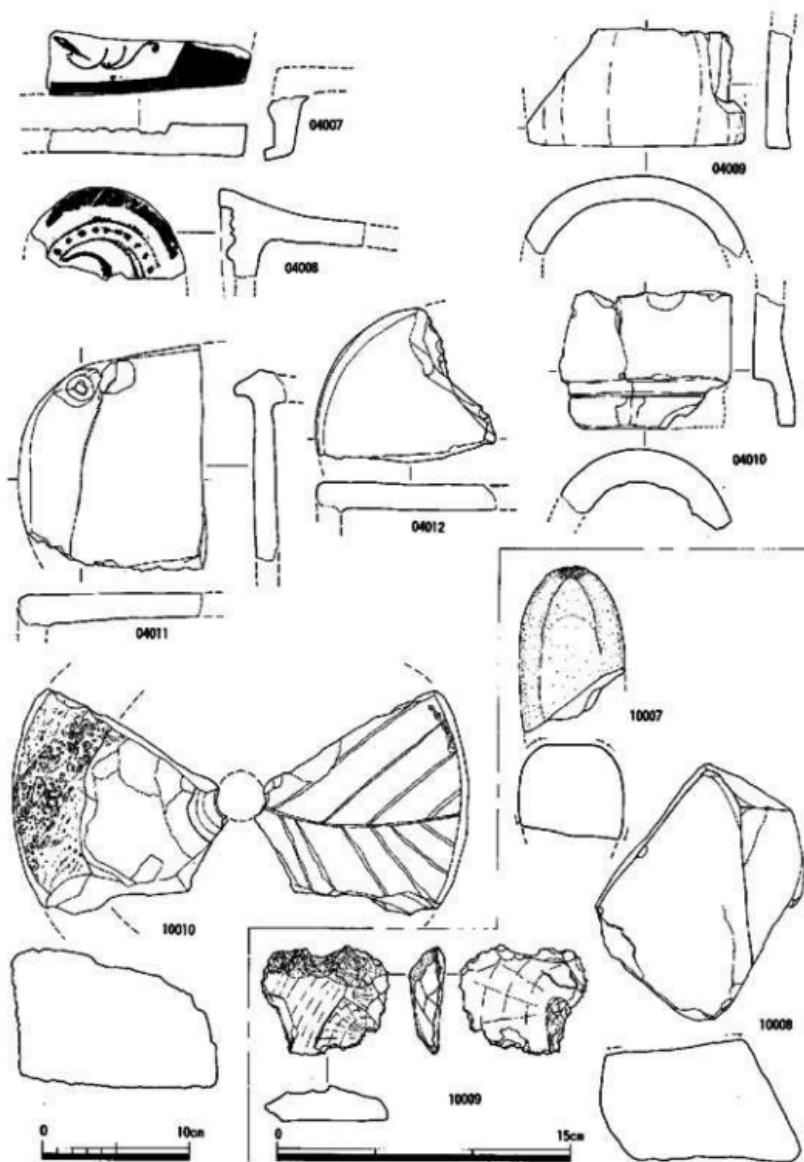
第20図 2区出土土器実測図-4 (縮尺1/2,1/3)



第21図 2区出土土器実測図-5 (縮尺1/2, 1/3)



第22図 2区出土瓦実測図（縮尺1/4）



第23図 2区出土瓦・石器実測図 (縮尺1/3,1/4)

04011, 04012は形状から考えて、隅瓦とも考えられるが、突起状の物が付く所から特殊な瓦であろう。

瓦質土器（瓦器）（第19図、PL. 22）

03002～03007は瓦質土器である。03002, 03003は壺形土器、03004は鉢形土器である。口径は03002が23cm、03003が14.8cm、03004が20.8cmを測る。

03005～03007は摺鉢である。03005は底部が欠損している。口径29.6cmを測る。03006の底径は11cm。03002～03007のすべてがSX-01からの出土である。

04014, 04015は瓦質の瓶の把手であろう。SX-100より出土。

石 器

1区出土の石器（第16図、PL. 17）

1区からは少量の石器しか出土しなかった。10001は玄武岩製の大型蛤刃石斧で刃部を破損している。研磨は全面に丁寧に施し、重量1,120gを測る。SD-01から出土。10002は玄武岩製の大型蛤刃石斧の刃部のみで、他は欠損している。両面丁寧な研磨を施している。刃部もV字状に造りだされている。SD-01から出土。10003は局部磨製石斧である。玄武岩製で主要剥離面側は大まかな剥離によって仕上げられており、裏面の側辺部には細かな段階状剥離が認められる。刃部は一部研磨されているところからこれで完形品なのか未製品なのかは定かでない。重量355gを測る。表土から出土。10004は砂岩製の砥石である。4面すべて砥石面として使用している。SD-01の下層から出土。10005, 10006は石包丁である。10005は頁岩製で、全面丁寧に研磨されている。約半分ほど欠損している。10006は小型で研磨は終了している。石材は輝緑凝灰岩である。

2区出土の石器（第23図、PL. 22）

10007は端部に打烈痕があることと全面が研磨されていることから玄武岩製の磨石である。

10008は変成岩の砥石である。10007, 10008ともSX-100からの出土である。

10010は石臼の破片である。推定径30cmで中央部の孔は径4cmを測る。裏面に木の葉状の刻紋を配する。石材は阿蘇凝灰岩である。SX-04出土である。

第Ⅳ章 まとめ

1. 太田遺跡群について

太田遺跡群は、第1次調査(田・飯盛線第3次調査)と第2次調査(飯盛・吉武地区圃場整備第6次調査)、太田遺跡第3次調査(市道野方・金武線第6次調査)がある。

これらの調査で約3haの調査を行ったことになるが、太田遺跡群の広がりは大きなものではなく日向川とその支流にはさまれた部分である。その中で太田1次で明らかとなった様に西側にも谷部を持つことが判明し、なお一層その範囲が狭められた。遺跡としては約6ha程度と考えられる。

遺構は弥生時代後期、古墳時代、12世紀、18世紀のものが主である。しかしながら、全体的に削平を受けているため遺構の遺存状態は極めて悪く溝・壘塀墓・竪穴式住居址等が辛うじて残っている状況である。

日向川を境にして東・南側の飯盛・吉武遺跡群の遺構の密集具合と比べ非常に希少である。この要因には占有する土地のひろがりが無く、常に日向川の氾濫に見舞われる土地よりも広大な東・南・北台地が存在したからにはかならない。

2. 近世の陶磁器—特に能古焼について—

出土遺物の中に有田焼と共に能古焼と称する遺物が数点出土した。能古焼は福岡市西区能古にある窯跡で昭和62年、能古博物館の依頼により九州大学文化史研究所の田崎博之氏が発掘調査を行った。諸般の事情に依り報告はいまだ未刊であるが、昭和63年度にこの窯跡を市文化財指定史跡とし、指定を行った。この指定に携わったことでいろいろな資料分析を行う機会に恵まれた。能古窯跡についてふれてみたい。

[位置と文献史料]

博多湾に浮かぶ能古島の南側に位置する。能古渡船場より北西約1kmの標高23mから28mに位置し「福岡市文化財分布地図」(西部Ⅲ)の「能古南部」に能古焼古窯跡として掲載されている。周辺には東ノ城城址、箱式石棺墓等の遺跡が分布している。また、能古白鬚神社おくんち行事(市無形民俗文化財)、石橋家廻船資料(市有形民俗文化財)等の文化財が豊富である。

能古焼古窯跡は貝原益軒の『筑前国統風土記』には記述ではなく、寛政の頃書かれた『筑前国統風土記附録』に「明和の頃より此嶋にて陶器を製す。」(残嶋の項記載)、さらに文化年間から天保年間にかけて書かれた『筑前国統風土記拾遺』には「此寺の上の山に陶器をつくる土あり。天明初年此土をとりて製せしか、いく程もなく其事止みたり。」とある。また、『筑前町村書上帳』早良郡(四)の能古島の項に「天明初年之頃此嶋にて製候、五ヶ年程ニ而相止、土ハ神王寺上ノ山

より出候、業ハ天草ヨリ買入候由。」と記載されている。このほか、天明七年(1787年)の頃に有田の『皿山代官旧記覚書』に「一、一筆啓達候、筑前残崎・須恵両山へ有田筋より佐十郎と申す者、焼物細工に罷越し居り候段、相聞き候に付、捕方のため、下日付共差し越され候処、……後略」と記載されている。

以上の文献史料からは明和・天明頃の短い期間に能占で陶磁器が生産されたことが記載され、発掘調査の結果、出土した遺物もそれを証明するものであった。

〔窯跡〕

昭和63年10月の発掘調査結果から窯本体は、焚口部、焼成室7室を含む8室構造の連房式登窯である。窯跡の前面はほぼ平坦に削られ、窯尻の後方には馬蹄形の溝がめぐる。また、窯跡の南半分の両側で溝状遺構を検出した。窯本体の全長は22m、窯尻後方の馬蹄形の溝を含めるると26.5m、比高差5.2mをはかる。主軸方向はN-72°50'-Wである。ただ上部(第5~第7室)は、主軸が北側にずれ、焚口から右側にカーブを呈する。焼成室も第1室から第7室に向けて次第に大きくなり、第1室では1.32m×2.68mに対して第7室では3.16m×5.28mで、約2倍となっている。焼成室はいずれも南側に出口を設けている。床面は西(焚口部)に向かって若干傾斜する。奥壁は第1~第4室が石積みで構成され、第5~7室の奥壁は土積みで構成されている。壁体の遺存状態は比較的良好で、高さ0.7~1.6mほどが遺存していた。壁体の厚さは基底で65~90cmで、第6室を除く全室の南側にある側壁に色見穴があることを確認した。壁体内部には博や窯道具が塗り込められ、壁体の修復が繰り返されたことが窺える。

〔出土遺物〕

遺物は窯跡の焼成室内部、南壁の外側の遺物瀧り、および調査区南側の溝状遺構の3ヵ所から集中して出土した。窯跡の焼成室内部では、窯体が崩落した瓦礫層の下から陶磁器・窯道具の破片が出土した。また、第6・7室では火床部分を中心として窯道具が散乱した状態で出土した。南壁の外側の遺物瀧りは、焼成室内から窯道具が撒き出された状態のものと、窯体に窯道具が立てかけられた状態のものに分けられる。陶磁器の破片は少量しか含まれず、窯道具がほとんどであった。出土遺物の中で、もっとも量が多いのは窯道具である。つづいて陶磁器が多いが、その大部分が有田焼系の染付けで、碗・湯呑碗・小皿・中皿・蓋・紅皿などがある。特に皿類は、見込に昆虫紋様を手描きし、蛇の目高台に一重もしくは二重の方形枠内に「渦巻」を記するのが特徴的である。この手法は有田焼の主流ではなく有田焼系とされる有田周辺の簡江窯の手法で、文献資料『皿山代官旧記覚書』に記載されている事柄と一致する。このほか陶器があるが、これは高取焼系のもので、1~2割を占める。この窯から基本的には日常雑器が生産され、磁器と陶器が同時に焼成されている。遺物の時期は18世紀後半に比定できる。この他、焼成室内部から銅鏡(寛永通宝)が5枚出土している。

能古焼古窯跡は文献史料からも発掘調査の結果からも江戸時代中期後半(明和・天明頃)に陶磁器を生産した窯で、その主流は有田焼系の磁器と高取焼系の陶器で、主に日常雑器が生産されていた。江戸時代中期後半に開窯され、有田焼系の磁器、高取焼系の陶器を焼成した福岡市域内で唯一残された古窯跡であり、窯の保存状態も非常に良い。

これら能古から焼かれた陶磁器が福岡市域内からかなり出土していることが、能古古窯址から発見されてから判明した。今まで有田焼としていた磁器の中から数多くの能古焼が発見されている。

能古古窯址についてはいずれ詳しい報告が出版されると思われる所以個別の内容は報告に譲るとして福岡市域内で発見されている遺跡の一覧を次にあげておく。

有田遺跡群

原遺跡群

太田遺跡群

吉武遺跡群

博多遺跡群

詳細には胎土分析を行なう必要がある。現時点では資料の蓄積をまって能古焼と有田焼(有田外山)との比較検討をいずれ行いたい。

図 版

PLATES



1. 1区全景（南から）



2. 1区全景（北から）



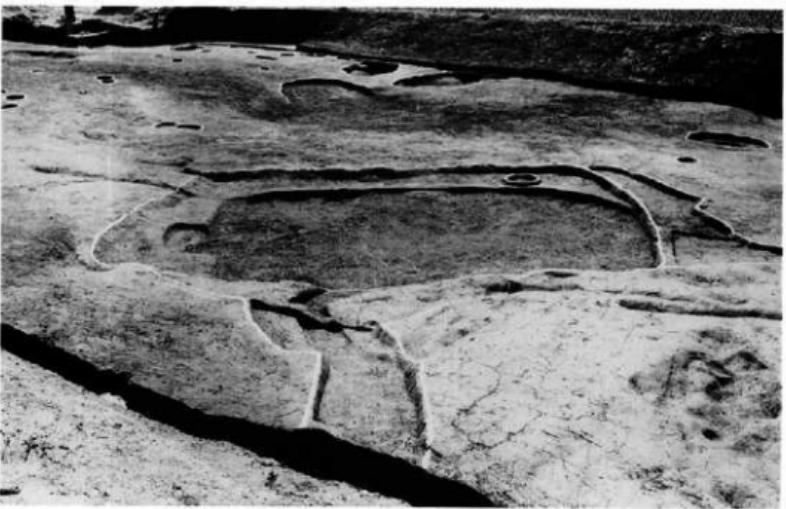
1. 1区 SD-02と水田址全景（南から）



2. 1区 SD-04と水田址全景（北から）



1. 1区全景 (南から)



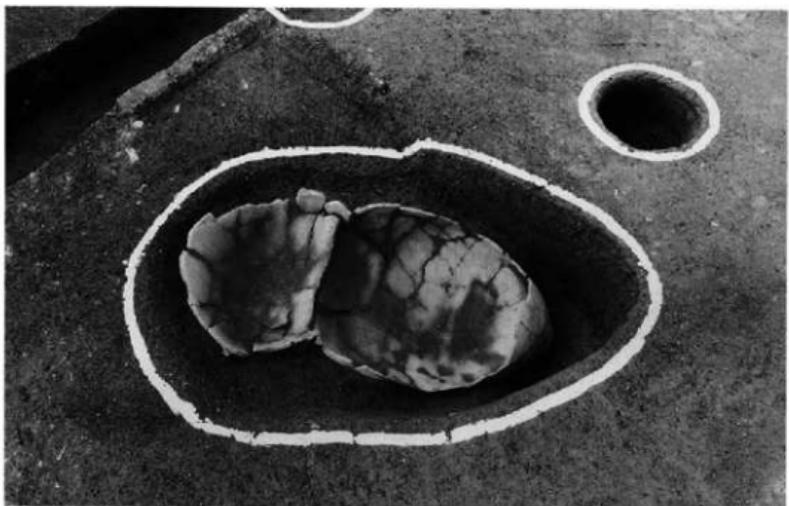
2. 1区 SC-01近景 (東から)



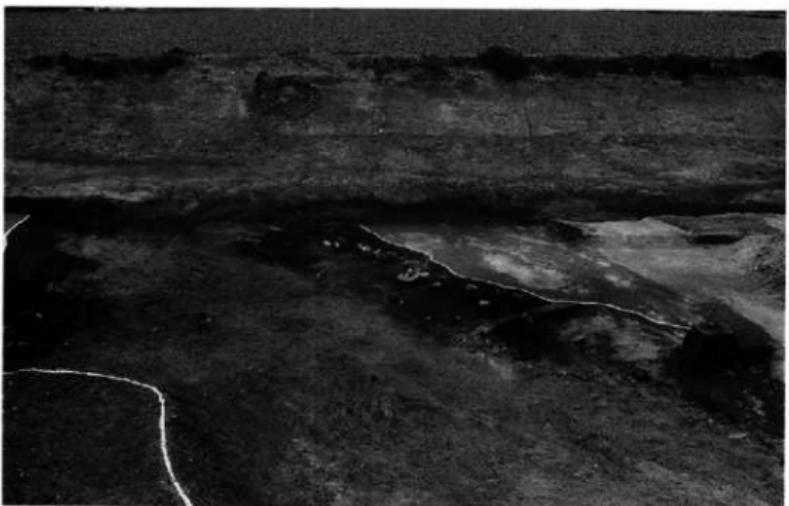
1. 1区 SD-02全景（北から）



2. 1区 SD-04近景（東から）



1. 1区 SK-100検出状態（南から）



2. 1区 SD-02近景（東から）



1. 1区 SD-02遺物出土状態（南から）



2. 1区 SD-02遺物出土状態（東から）



1. 1区 SD-02全景と取水口（南から）



2. 1区 SD-02遺物出土状態（北から）



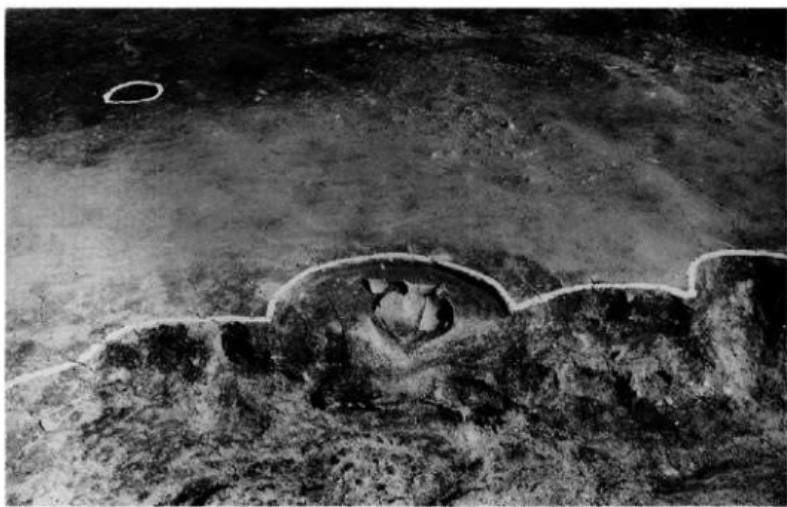
1. I 区 SD—02 遗物出土状態



2. I 区 SD—02 遗物出土状態



1. 1区 SD-02遺物出土状態



2. 1区 SD-02遺物出土状態



1. 1区土層断面（東から）



2. 1区土層断面（東から）



1. 2区全景（北から）



1. 2区近景（北から）



2. 2区全景（南から）



1. 2区 SK-11検出状態（東から）



2. 2区 SK-11土層断面（東から）



1. 2区 SK-11遺物出土状態（東から）



2. 2区 SK-17検出状態（東から）

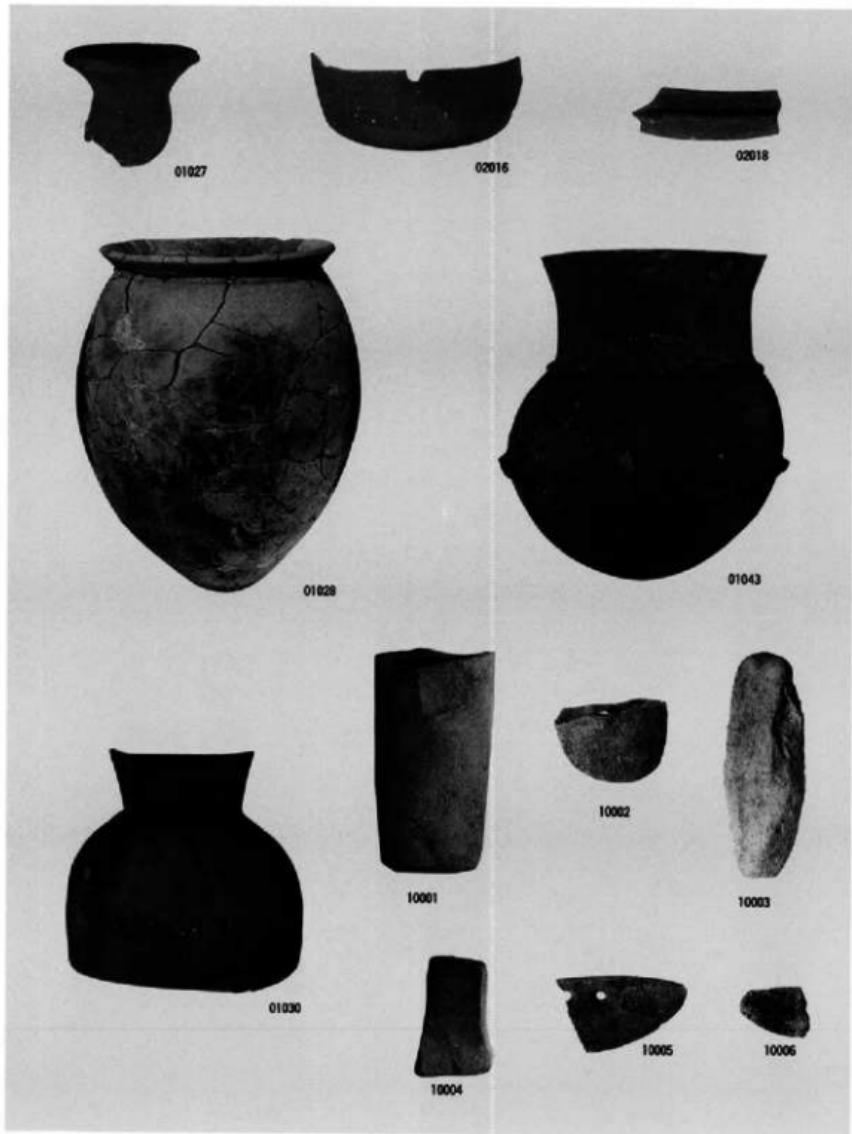


1. 2区 SD-01内杭列検出状態（西から）

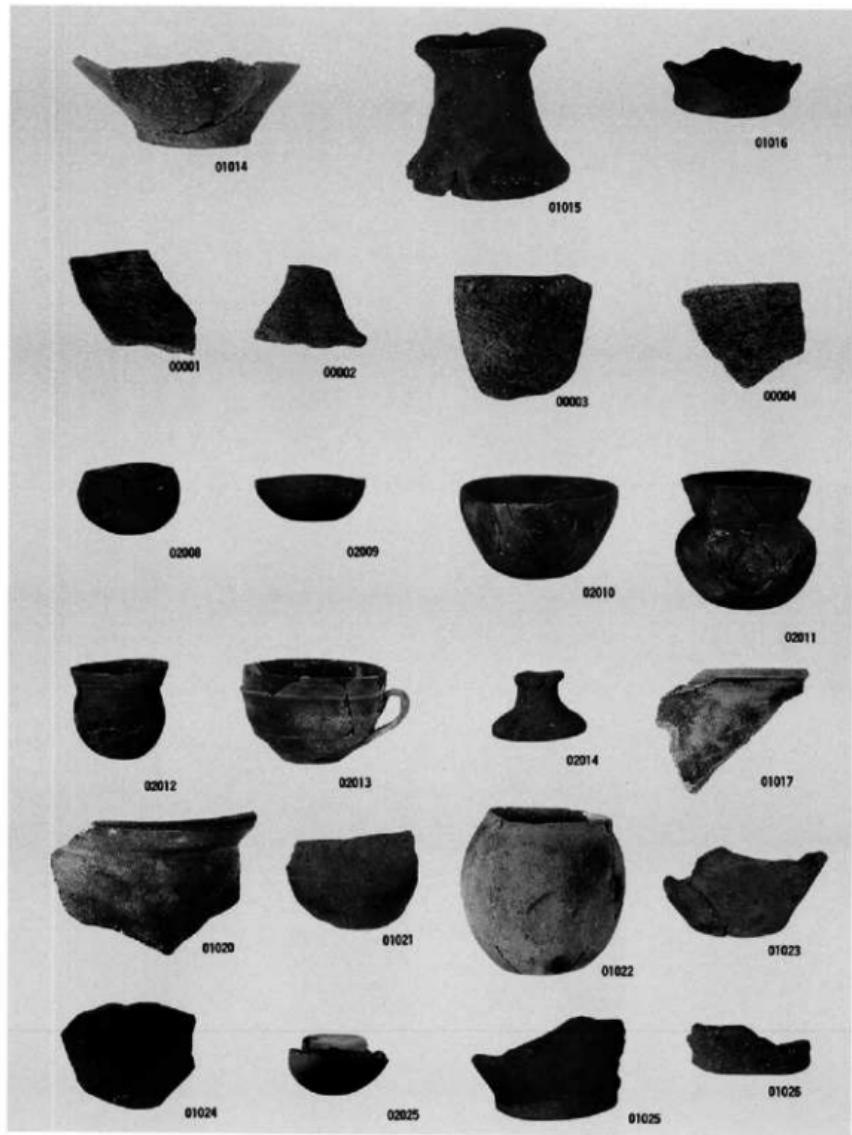


2. 2区 SD-01内杭列検出状態（南から）

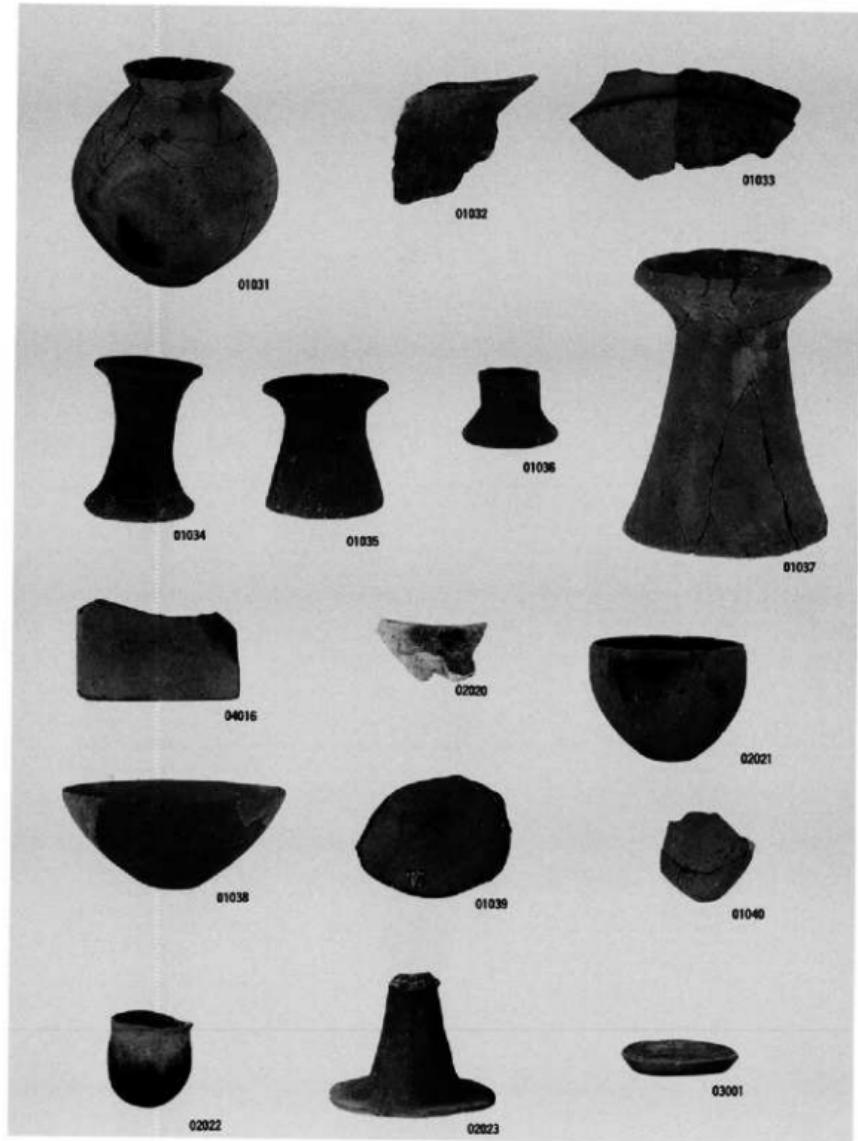




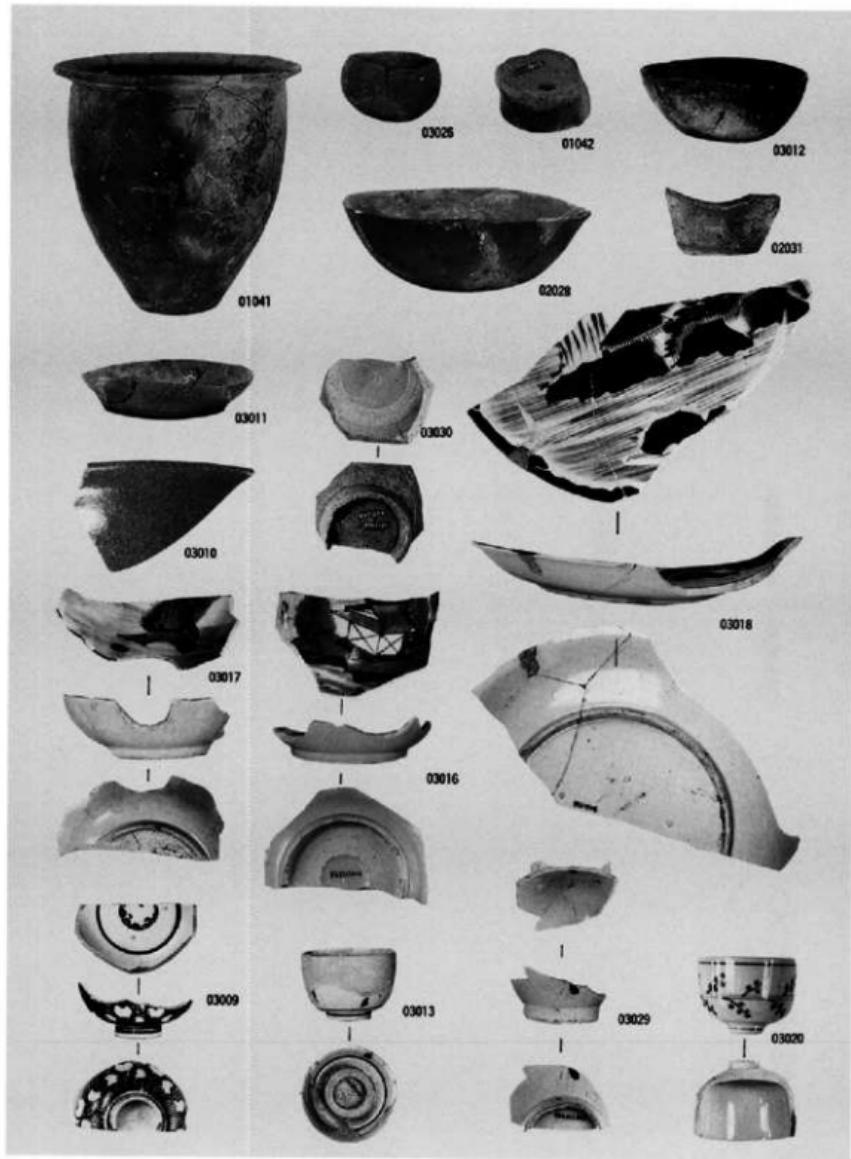
1区出土遺物（縮尺1/2,1/4,1/6）



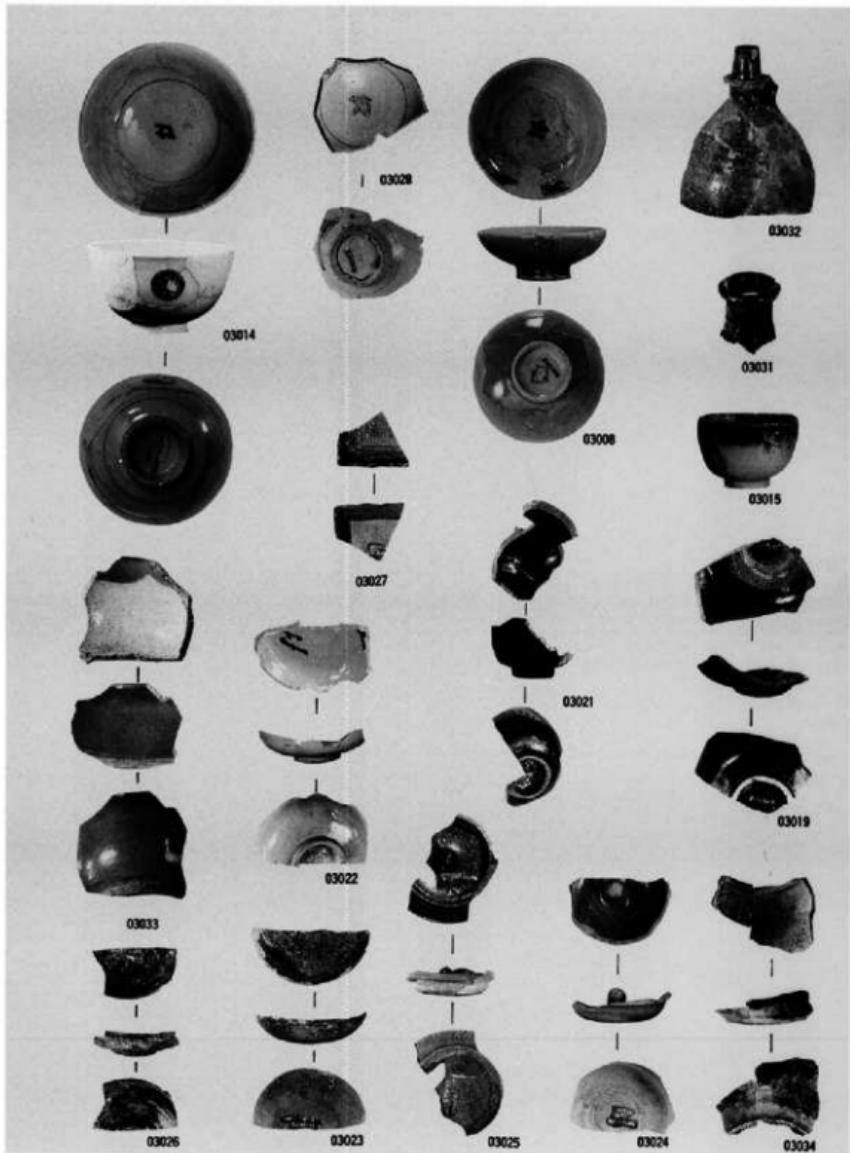
1. 2区出土遺物（縮尺1/4）

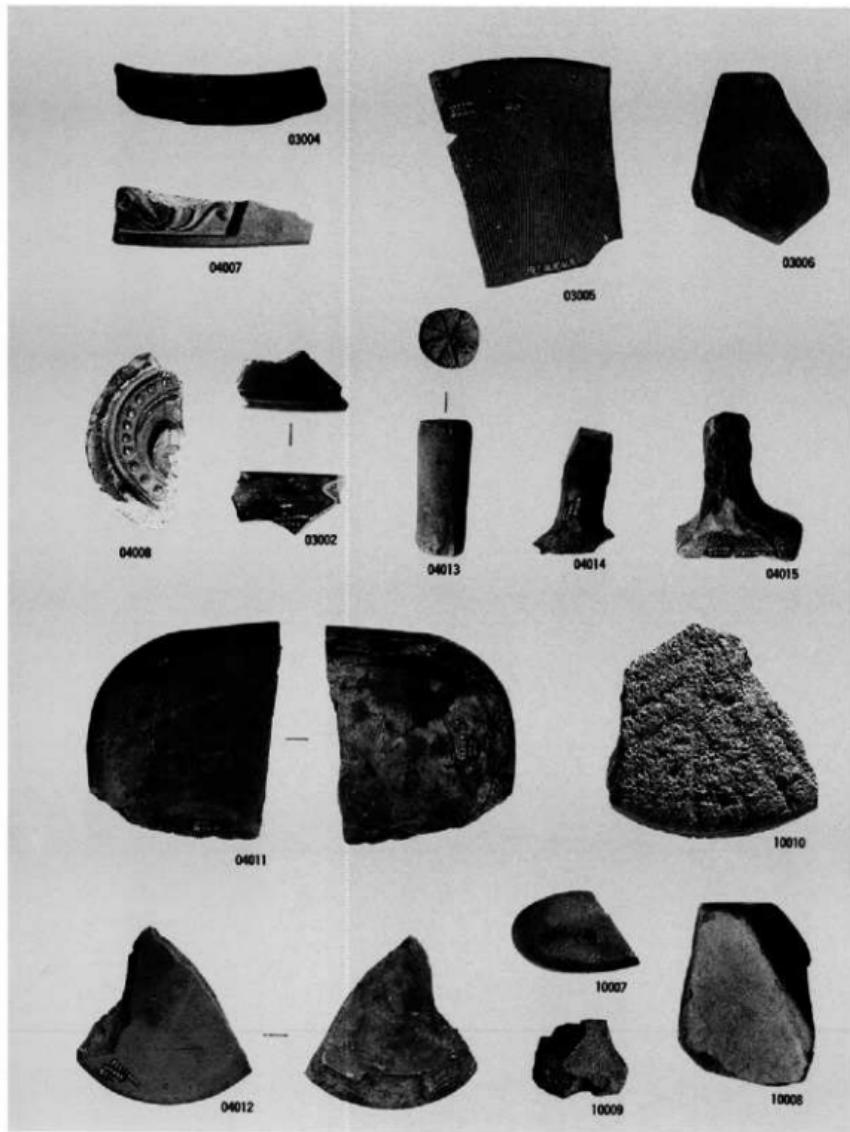


2区出土遗物 (缩尺1/4, 1/6)



2区出土遺物 (縮尺1/2, 1/4, 1/6)





2区出土遗物 (缩尺1/2, 1/4)

福岡市西区

太田遺跡

(III)

市道野方・金武線新設道路建設に伴う
発掘調査報告書

福岡市埋蔵文化財報告書第304集

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 博巧印刷株式会社

福岡市南区那の川1丁目9の4

